

平成17年 1月期

中間決算短信（連結）

平成16年 9月14日

上場会社名 株式会社 ACCESS

上場取引所 東証マザーズ

コード番号 4813

本社所在都道府県 東京都

(URL <http://www.access.co.jp>)

代表者 役職名 代表取締役社長 氏名 荒川 亨

問合せ先責任者 役職名 取締役管理本部長 氏名 福田 譲治 TEL (03) 5259 - 3511

中間決算取締役会開催日 平成16年 9月14日

親会社名 - (コード番号: -) 親会社における当社の株式保有比率: - %

米国会計基準の有無 無

## 1. 16年 7月中間期の連結業績（平成16年 2月 1日～平成16年 7月31日）

## (1) 連結経営成績

	売	上	高	営	業	利	益	経	常	利	益
		百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%		
16年 7月中間期	5,040		44.7	698	-	736	-				
15年 7月中間期	3,483		26.9	34	-	23	-				
16年 1月期	8,793		-	1,295	-	1,204	-				

	中間(当期)純利益	1株当たり中間(当期)純利益	潜在株式調整後1株当たり中間(当期)純利益
	百万円	%	円銭
16年 7月中間期	442	-	4,306.11
15年 7月中間期	31	-	1,742.73
16年 1月期	1,429	-	76,848.50

(注) 1. 持分法投資損益 16年 7月中間期 - 百万円 15年 7月中間期 - 百万円

16年 1月期 - 百万円

2. 期中平均株式数(連結) 16年 7月中間期 102,838 株 15年 7月中間期 18,314 株

16年 1月期 18,600 株

3. 会計処理方法の変更 有 少額減価償却資産について、取得時に全額費用処理する方法に変更いたしました。

4. 売上高、営業利益、経常利益、中間(当期)純利益におけるパーセント表示は、対前年中間期増減率

5. 当中間連結会計期間において、1株を5株に分割いたしておりますが、1株当たり中間純利益につきましては、株式分割が期首に行われたものとして算出いたしております。

6. 当中間連結会計期間の株式分割について、遡及修正を行った場合の詳細につきましては「1株当たり情報」の注記をご参照ください。

## (2) 連結財政状態

	総	資	産	株	主	資	本	株	主	資	本	比	率	1株当たり株主資本
		百万円		百万円		百万円	%		円銭					円銭
16年 7月中間期	11,665			9,911		85.0		95,398.81						
15年 7月中間期	7,813			6,339		81.2		345,930.35						
16年 1月期	10,897			8,950		82.2		437,336.19						

(注) 1. 期末発行済株式数(連結) 16年 7月中間期 103,894 株 15年 7月中間期 18,326 株

16年 1月期 20,466 株

2. 当中間連結会計期間の株式分割について、遡及修正を行った場合の詳細につきましては「1株当たり情報」の注記をご参照ください。

## (3) 連結キャッシュ・フローの状況

	営業活動による	投資活動による	財務活動による	現金及び現金同等物
	キャッシュ・フロー	キャッシュ・フロー	キャッシュ・フロー	期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
16年 7月中間期	1,394	211	620	5,920
15年 7月中間期	307	269	14	3,211
16年 1月期	1,250	876	1,135	4,105

## (4) 連結範囲及び持分法の適用に関する事項

連結子会社数 6社 持分法適用非連結子会社数 0社 持分法適用関連会社数 1社

(注) 当中間連結会計期間に、アクセス・システムズ・アメリカ・インクは清算を行っております。

## (5) 連結範囲及び持分法の適用の異動状況

連結(新規) 0社 (除外) 0社 持分法(新規) 0社 (除外) 0社

## 2. 17年 1月期の連結業績予想（平成16年 2月 1日～平成17年 1月31日）

	売	上	高	経	常	利	益	当	期	純	利	益
		百万円		百万円		百万円		百万円				
通 期	10,228			2,002		1,199						

(参考) 1株当たり予想当期純利益(通期) 11,547円45銭

上記記載金額は、百万円未満を切り捨てて表示しております。

上記予想に関する事項は、添付資料のP11をご参照ください。

## 1. 企業集団の状況

当社グループは、当社、子会社6社及び関連会社1社より構成され、移動体情報端末（携帯電話等の携帯情報端末）や固定・屋内情報端末（家庭用ゲーム機、テレビ等の情報家電）などの、パソコン以外（以下「non-PC」という。）の端末向けの組み込みソフトウェアの開発・販売を行っているほか、技術提供等を通じて関連する幅広いサービスの提供を進めております。（ソフトウェアの受託開発事業）

また、既存の経営資源を最大限に生かすため、コンテンツ・サービス事業も行っております。（コンテンツ系事業）

### (1) 当社とグループ各社の事業における位置付け （ソフトウェアの受託開発事業）

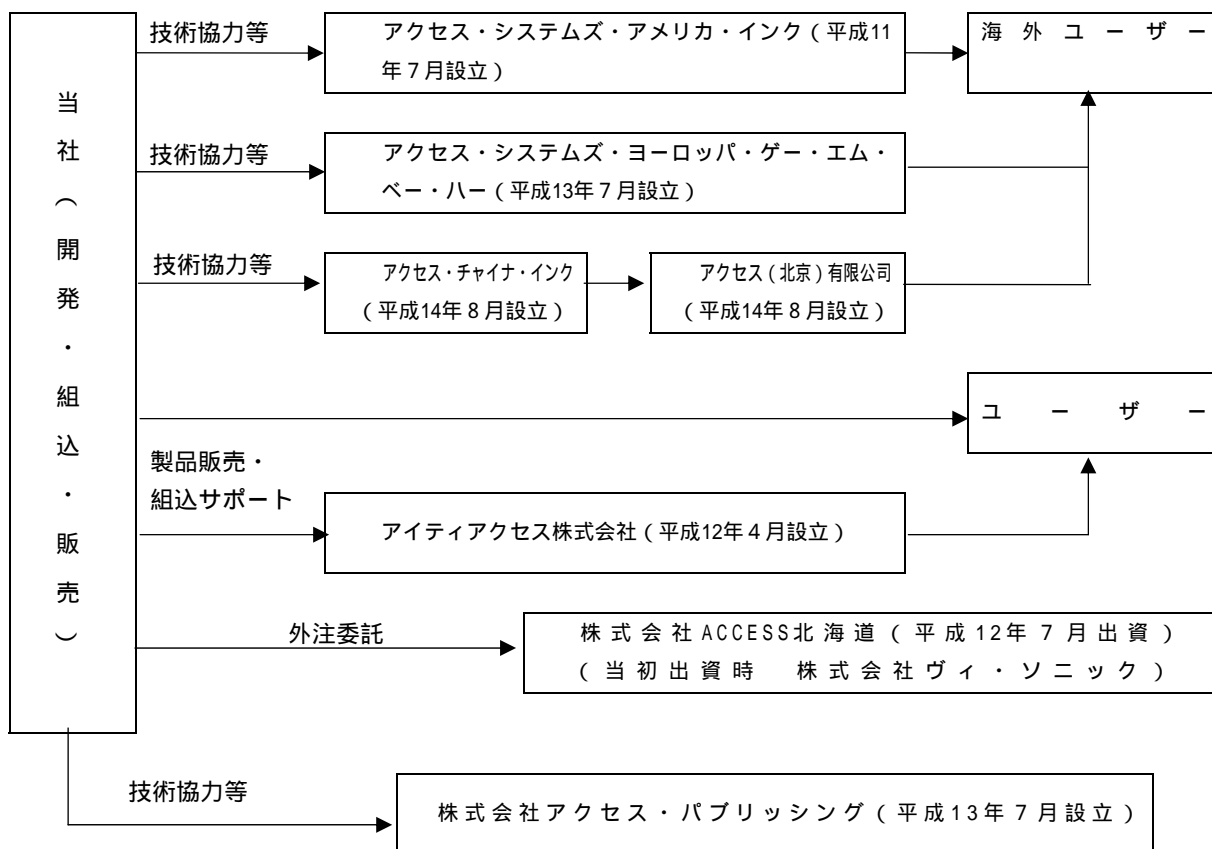
会社名	主な事業内容
当 社	non-PC端末向けの組み込みソフトウェアの開発・販売
アクセス・システムズ・アメリカ・インク	北米・南米市場向けの当社製ソフトウェアの開発・販売
アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー	欧州市場向けの当社製ソフトウェアの開発・販売
アクセス・チャイナ・インク	中国市場での事業展開を統括する持株会社
アクセス（北京）有限公司	中国市場向けの当社製ソフトウェアの開発・販売
株式会社ACCESS北海道	組み込み業務の外注委託先
アイティアアクセス株式会社	当社製ソフトウェアの販売代理店

### （コンテンツ系事業）

会社名	主な事業内容
株式会社アクセス・パブリッシング	non-PC端末を主対象としたデジタル・コンテンツの販売及び雑誌・書籍の編集、発行

（注）アクセス・システムズ・アメリカ・インクは、平成16年1月31日を以て営業活動を終了し、同社の主要業務につきましては、本社事業体制に吸収のうえ再編成されております。なお、同社は当中間連結会計期間中に清算を行っております。

(2) 事業系統図



連結子会社

持分法適用関連会社

- (注) 1. 株式会社ヴィ・ソニックは、平成15年8月1日から商号を「株式会社ACCESS北海道」に変更いたしております。
2. アクセス・システムズ・アメリカ・インクは、平成16年1月31日を以て営業活動を終了し、同社の主要業務につきましては、本社事業体制に吸収のうえ再編成されております。なお、同社は当中間連結会計期間中に清算を行っております。

## 2. 経 営 方 針

### 1. 会社の経営の基本方針

世界標準となり得る基礎的機能を持つソフトウェアを日本から発信したい

「日本発の言語やOSなどを、自分たちの手で開発して、広く世界に送り出そう」という理念のもと、当社は昭和59年に設立されました。以来、当社は一貫してオリジナルの基礎的機能を持つソフトウェアの創造にこだわり、独自の道を歩んでまいりました。時代がどう変わろうと、当社はこの初心をどこまでも極め続けてまいります。

ネットワークを軸にnon-PC端末の未来市場にフォーカス

オリジナリティにこだわるなかで、当社はいち早く「ネットワークの時代」を予見いたしました。汎用機であるコンピュータとは違った、専用機器とネットワークによる「誰にも使いやすく便利な情報機器」の市場に向けて独創的な製品を生み出し「日本発のオリジナルソフトを」という目標を具現化してまいります。

競争ではなく「共創」の精神を理想として

ネットワークの時代には、みんなで知恵を出し合い、共同でモノを創り出していくことが大事だと、当社は考えております。この「共創の精神」の具現化が当社の目指すところであります。

### 2. 会社の利益配分に関する基本方針

当社は、株主の皆様に対しての利益還元を経営の重要な課題の一つとして位置付けており、事業展開の状況と各期の経営成績を総合的に勘案して決定することを基本方針としております。

当面は、安定した財務体質に裏付けられた経営基盤の強化を図るため、内部留保に重点を置くこととしておりますが、安定的かつ継続的な利益還元を実施することが、企業としての責任と考えております。

### 3. 投資単位引き下げに関する考え方及び方針等

当社は、比較的少額で株式購入が可能となる投資単位の引下げにつきまして、株式市場活性化のための有用な施策であると認識しており、株式市場で取引可能な株式投資単位に関して適宜見直していくことを基本方針としております。

具体的には、株式市場の趨勢、当社株式の株価の推移、当社グループの業績の推移等を総合的に判断し、株式分割等の積極的な対応を図ってまいります。

### 4. 目標とする経営指標

当社グループといたしましては、安定した連結当期純利益の確保を、当面の目標としております。

この目標達成のため、売上高構成比において、ロイヤリティー収入の構成比を40%以上確保し、製品売上高の売上総利益率50%以上を維持することが、重要であると考えております。

### 5. 中長期的な会社の経営戦略及び会社の対処すべき課題

当社グループは、今後の事業展開として、研究開発の拡充及び海外展開が重要であると考えております。

#### (1) 研究開発の拡充

当社グループが、インターネット関係のソフトウェアを核としたnon-PC端末の分野で、現在の市場シェアを維持し拡大していくためには、今まで以上に、優秀な研究開発者による充実した研究開発活動が必要であると考えております。

ブラウザ技術の向上

情報家電向けのブラウザであるNetFrontについては、さらに改良を加え、コンポーネント化（部品化）の推進により、次世代携帯電話、家庭用ゲーム機、家庭用据え置き電話、カーナビゲーション、デジタルカメラ、デジタルテレビ等の各種機器への組込みの容易性の向上を図ってまいります。

#### 開発キット・SDKの開発

NetFront等のSDKを開発・改良し、当社の得意先であるメーカー等及び販売代理店の技術者等が各々の機器毎に容易に組み込める開発キットの開発を推進いたします。

#### 新規機能の技術開発

今後のインターネット機能に要求される新規機能を先行開発し、当社製ソフトウェアに組み込むことで、市場投入を行ってまいります。具体的には、e-コマースの基本機能となるSSL（注1）をベースとしたインターネット上のカード決済機能を研究開発いたしましたので、これを当社製ソフトウェアに付加することで、様々な情報家電、携帯電話等に順次搭載してまいります。

この他に、無線通信として有力なBluetooth（注2）向けのプロトコルスタック（注3）を開発し、当社製ソフトウェアとの組合せによる各種機器への搭載や、Javaをベースとした遠隔制御向けのミドルウェアの開発、情報家電向けIPv6（注4）対応プロトコルスタック（注3）、カーナビゲーション向けインターネットブラウザ、携帯端末を使ったチケットレス予約・入場システム等の開発を行っております。

## (2) 海外展開

海外展開については、北米・南米、アジア、欧州と世界市場に事業展開いたします。海外展開の内容は、以下のとおりであります。

#### 北米・中南米

北米・中南米におきましては、次世代携帯電話・PDA（携帯情報端末）向けの当社製ソフトウェア組込み販売の他、サーバー事業に向けたトータルソリューションの提供を行っております。

今後は、次世代通信市場の成長状況を見極めながら、現地の通信事業者・ソフトウェア製造業者との協力を強化し、本社の研究開発及び営業リソースを機動的に北米・中南米市場に配分いたしてまいります。

#### アジア

アジア市場としては、韓国、台湾、中国、香港、インド、シンガポールなどが有力市場であり、平成13年11月、平成14年7月に台湾（台北）、韓国（ソウル）にそれぞれ駐在員事務所を設立し、平成14年8月には中国（北京）にアクセス（北京）有限公司を設立いたしました。

また、携帯電話分野は日本と同様に、アジア各国では若者層を中心に非常に高い普及率になっており、モバイルインターネットのニーズは高く、各国の現地企業と協力してモバイルインターネットのサービス構築を推進してまいります。

#### 欧 州

欧州では、ドイツにおいてアクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハーを設立し、次世代携帯電話に向けた、当社製ソフトウェアの供給体制を確立いたしました。これにより、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、スペイン、ギリシャで開始されたインターネットを利用した携帯電話サービス向けの対応を完了いたしており、今後、欧州各国で開始される同様のサービスにも対応してまいります。

欧州市場では、次世代携帯電話のみならず、デジタルテレビ、ケーブルテレビ等に向けた当社製ソフトウェアの提供など、様々な業容拡大の可能性がります。

## 6. コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方及びその施策の実施状況

### （コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方）

当社及び当社グループは、株主、取引先より高く評価され、社会から信頼される企業として、コーポレート・ガバナンスの強化に取り組んでおります。具体的には、毎月の取締役会、経営会議の他、部長職以上の部門長会議を毎月開催し、十分に議論し、的確かつ迅速に意思決定ができる体制の確立を図っております。

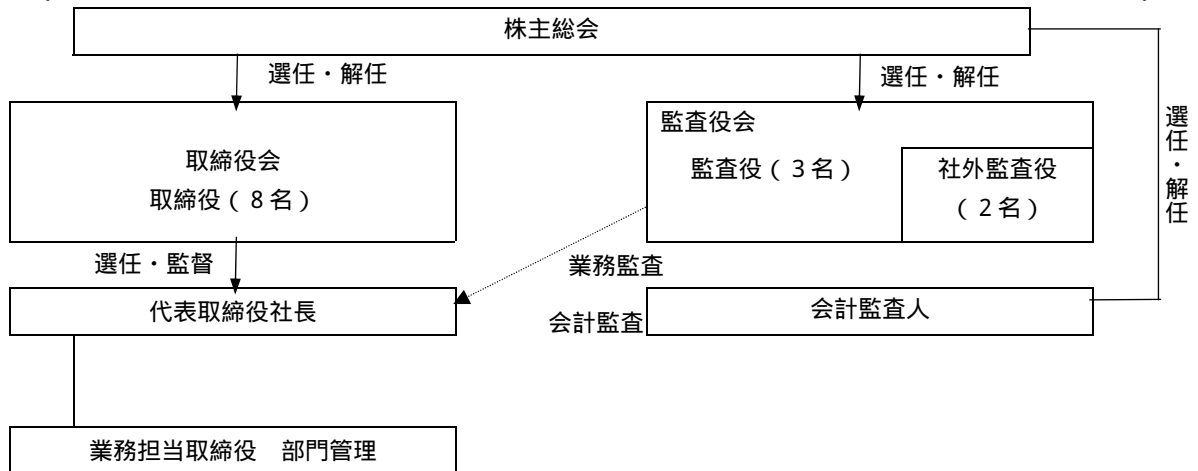
なお、当社の監査役3名のうち2名は社外監査役であり、当該社外監査役と当社との間に利害関係はございません。

また、情報開示面では、機関投資家・アナリスト向け決算説明会の開催や個別ミーティング等によって、詳

細な情報提供に努めております。

さらに、コーポレート・ガバナンスのいっそうの充実を図るため、現在、執行役員制度の導入を検討いたしております。

(経営上の意思決定、執行及び監督に係る経営管理組織その他のコーポレート・ガバナンス体制の状況)



(注) 1. SSL

WWWブラウザ及びWWWサーバー間でやり取りするデータのセキュリティを守るための技術。相手のWWWサーバーが本物であることを認証したり、ユーザーがブラウザでデータを流す前に、暗号化を行うことで、盗聴をされる危険をある程度防げる。

2. Bluetooth

携帯電話機やパソコンその他のポータブル機器の間をつなく、低価格の短距離無線伝送技術の使用コード名。

3. プロトコルスタック

データ通信を行うために必要な取り決め(プロトコル)を実装したソフトウェア。

4. Ipv6

アドレス資源の枯渇が心配される現行のインターネットプロトコルIpv4をベースに、管理できるアドレス空間の増大、セキュリティ機能の追加、優先度に応じたデータの送信などの改良を施した次世代インターネットプロトコル。

### 3. 経営成績及び財政状態

#### 1. 当中間連結会計期間の概況（平成16年2月1日～平成16年7月31日）

##### (1) 経営成績

当中間連結会計期間におけるわが国の経済は、国内総生産（GDP）が継続的にプラス成長となり、輸出や設備投資の増加が見られ、景気回復の兆しを見せています。しかしながら、雇用情勢や所得環境の厳しさが依然として続いており、構造的なデフレ状況からの脱却に至らず、本格的な経済回復には、今少し時間がかかると思われます。

一方、当社の事業の中心であるnon-PC端末向け組込みソフトウェアの分野では、携帯電話を含めたユビキタスな時代に向けた情報家電の市場が、新しい技術の進歩とともに確実に拡大し続けております。

このような環境の中、当社といたしましては、業界のリーディングカンパニーとしてnon-PC端末向けブラウザ等のソフトウェアの開発・販売に取り組んでおります。

当中間連結会計期間におきましては、従来の携帯電話及び次世代高速通信携帯電話サービスに向けたマイクロブラウザ「Compact NetFront」、「Compact NetFront Plus」、「NetFront v3.0 Wireless Profile」、次世代ブロードバンド時代とユビキタスな時代を実現するあらゆる情報家電向けブラウザ「NetFront v3.1」及び周辺関連ソフトウェア等の拡販を積極的に行いました。国内では、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモの携帯電話を中心に、「FOMA」携帯端末すべての機種に「NetFront v3.1」を供給いたしました。また、携帯電話以外では、株式会社東芝のデジタルハイビジョン液晶テレビ、ソニー株式会社のロケーションフリーテレビ新型「エアボード」、東日本電信電話株式会社及び西日本電信電話株式会社のIPテレビ電話端末「フレッツフォン1000」に、「NetFront v3.1」を、パイオニア株式会社が販売するHDD「サイバーナビ」に、「NetFront Automotive Profile」を供給いたしました。海外におきましても、欧州では、携帯電話中心に、「iモード」対応の東芝製、Panasonic製及びNEC製欧州版携帯電話に「Compact NetFront Plus」や周辺ソフトウェアである「AVE-TCP for Wireless」等を供給いたしました。北米では、Palm Source社の最新OS「Palm OS Cobalt」に「NetFront v3.1」を供給いたしました。中国では、7月にチャイナユニコム向けサムスン製携帯電話にJavaソリューションを供給いたしました。新技術の開発につきましては、ウェブ閲覧時のサイト表示の高速化技術「Rapid-Render」、携帯電話向けトータルソリューション「NetFront Mobile Client Suite」、地上波デジタル放送に対応した携帯端末向けブラウザ「NetFront DTV Profile Wireless Edition」、QUALCOMMのBREW向けフル機能ブラウザ「NetFront for BREW」、ユーザーインタフェースフレームワーク「NetFront Dynamic Menu」、情報家電向けブラウザの最新バージョン「NetFront v3.2」、「NetFront SDK v3.2」の開発を、それぞれ発表いたしました。

この結果、当中間連結会計期間における売上高は50億40百万円（対前年同期比44.7%増加）、経常利益は7億36百万円、中間連結純利益は4億42百万円となりました。

事業の種類別セグメントの業績は、以下のとおりであります。

##### 1) ソフトウェアの受託開発事業

国際「iモード」の開始により、当社製ソフトウェアを採用する携帯端末メーカーが増加しているほか、次世代携帯電話関連の開発案件についても継続的に受託しており、売上高は45億13百万円（対前年同期比45.7%増加）となりました。これにより、対前年同期比で営業損益も大幅に改善し、営業利益7億12百万円を計上いたしました。

なお、ソフトウェアの受託開発事業の事業区分別の業績は、以下のとおりであります。

##### 製品売上高

製品売上高につきましては、受託開発の移動体情報端末におきまして、前連結会計年度に引き続き、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモが提供する「FOMA」及び「iモード」サービス、ヨーロッパにおける国際「iモード」サービスに対応した携帯電話の新機種向け、KDDI株式会社が提供する「@mail」及び「SMIL」サービスに対応した携帯電話の新機種向けにそれぞれ「Compact NetFront Plus」、「NetFront v3.1」の供給を行いました。

受託開発の固定・屋内情報端末におきましては、家庭用据え置き電話、デジタルテレビ向け等に「NetFront v3.0」の供給を行いました。

この結果、製品売上高は27億5百万円（対前年同期比26.3%増加）となりました。

## ロイヤリティー収入

ロイヤリティー収入につきましては、「Compact NetFront」、「NetFront v3.0」及び「NetFront v3.1」を搭載したインターネット接続サービスに対応した携帯電話の販売台数が増加傾向にあるため、移動体情報端末の売上高が増加いたしました。

この結果、ロイヤリティー収入は18億8百万円（対前年同期比89.5%増加）となりました。

事業部門別	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)		前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)		対前年 増減率	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)	
	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)		金額 (百万円)	構成比 (%)
製品売上高							
受託開発							
移動体情報端末	2,215	49.1	1,868	60.3	18.6	4,272	53.7
固定・屋内情報端末	399	8.9	199	6.4	100.1	1,085	13.6
その他	20	0.4	5	0.2	305.1	36	0.5
基盤開発	58	1.3	66	2.2	11.9	146	1.8
その他	11	0.2	3	0.1	250.5	8	0.1
小計	2,705	59.9	2,142	69.2	26.3	5,549	69.7
ロイヤリティー収入							
受託開発							
移動体情報端末	1,519	33.7	738	23.8	105.9	1,735	21.8
固定・屋内情報端末	250	5.6	191	6.2	31.3	574	7.2
その他	10	0.2	5	0.2	71.9	27	0.4
基盤開発	27	0.6	19	0.6	43.4	71	0.9
小計	1,808	40.1	954	30.8	89.5	2,407	30.3
合計	4,513	100.0	3,096	100.0	45.7	7,956	100.0

## 2) コンテンツ系事業

平成13年10月から、コンテンツ系事業の営業基盤の確立を目的として、月刊誌を創刊、販売を開始いたしました。当中間連結会計期間における売上高は、月刊誌を始めとする雑誌類の出版売上が堅調であり、これに伴い広告収入も増加傾向にあることから、5億27百万円（対前年同期比36.6%増加）を計上いたしました。また、デジタルコンテンツ制作につきましても本格的な営業活動が開始されております。当中間連結会計期間におきましては、コンテンツ事業のジャンル拡大のための初期投資費用が支出されましたことにより、営業損失は14百万円となっております。



## (2) 財政状態

当中間連結会計期間における連結ベースの現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、有形固定資産の取得に伴う支出 1 億23百万円（対前年同期比245.8%増）、無形固定資産の取得に伴う支出 1 億21百万円（同365.3%増）長期貸付金の支出 4 億61百万円等がありましたが、税金等調整前中間純利益を 7 億85百万円（前年同期は30百万円の損失）計上した他、売上債権の減少 6 億47百万円（同86.4%増）、株式発行による収入 5 億72百万円（前期は 7 百万円）等がありましたことにより、前中間連結会計期間末に比べて27億 8 百万円増加（同84.3%増）し、当中間連結会計期間末には59億20百万円となっております。

### （営業活動によるキャッシュ・フロー）

当中間連結会計期間におきましては、税金等調整前中間純利益で 7 億85百万円を計上した他、売上債権の減少による資金増加 6 億47百万円、減価償却費 1 億23百万円等により、営業活動による資金の増加は13億94百万円（対前年同期比353.9%増加）となっております。

### （投資活動によるキャッシュ・フロー）

当中間連結会計期間におきましては、定期預金の払戻 5 億円等を実施した一方で、パソコン等の事務関連機器の購入及び社内造作設備工事などの有形固定資産の取得 1 億23百万円、基幹システム構築などの無形固定資産の取得 1 億21百万円、長期貸付金の支出 4 億61百万円等がありましたことにより、投資活動による資金の減少は 2 億11百万円（前期は 2 億69百万円の増加）となっております。

### （財務活動によるキャッシュ・フロー）

当中間連結会計期間におきましては、関係会社が銀行借入を、また従業員によるストックオプションの行使が行われました結果、財務活動による資金の増加は 6 億20百万円（前期は14百万円の増加）となっております。

当社グループのキャッシュ・フロー指標の推移は以下のとおりであります。

	平成14年7月 中間期	平成15年 1月期	平成15年7月 中間期	平成16年 1月期	平成16年7月 中間期
株主資本比率（％）	80.6	83.7	81.2	82.2	85.0
時価ベースの株主資本比率（％）	656.7	401.8	680.2	1,202.0	2,021.7
債務償還年数（年）	-	-	0.6	0.2	0.1
インタレスト・カバレッジ・レシオ（倍）	-	-	71.8	269.2	662.7

（注）1．各指標は、いずれも連結ベースの財務数値を用いて、以下の計算式により算出しております。

株主資本比率：株主資本 / 総資産

時価ベースの株主資本比率：株式時価総額 / 総資産

債務償還年数：有利子負債 / 営業キャッシュ・フロー

中間期末における債務償還年数：有利子負債 / (営業キャッシュ・フロー × 2)

インタレスト・カバレッジ・レシオ：営業キャッシュ・フロー / 利払い

- 株式時価総額は、中間期末（期末）株価終値 × 中間期末（期末）発行済株式数により算出しております。
- 有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち、利子を支払っている全ての負債を対象としております。
- 営業キャッシュ・フロー及び利払いは、連結キャッシュ・フロー計算書に計上されている「営業活動によるキャッシュ・フロー」及び「利息の支払額」を用いております。
- 平成14年7月中間期及び平成15年1月期の債務償還年数（年）及びインタレスト・カバレッジ・レシオ（倍）は、営業活動によるキャッシュ・フローがマイナスのため記載いたしておりません。

## 2. 通期の見通し（平成16年2月1日～平成17年1月31日）

平成17年1月期の見通しにつきましては、我が国の経済の先行きに不透明感はあるものの、当社事業の属する事業分野におきましては、次世代携帯電話による新規サービスの国内インフラ整備の進行及び欧州等海外でのインターネット接続サービスの本格的な開始等、前期に引き続き、急速な市場拡大が期待されております。

海外事業につきましては、当社製ソフトウェアが、欧州及び中国等において、インターネット接続サービスに対応した携帯電話に採用されましたことから、拡販と黒字化に努めてまいります。

以上のような事業環境のなか、当期においても国内では「FOMA」を中心に、海外では欧州及び中国を中心に携帯電話関連のロイヤリティー収入が好調に推移すると見込めること、及びコスト管理に引き続き注力することにより、連結業績につきましては、売上高102億28百万円（対前年同期比16.3%増加）、経常利益20億2百万円（対前年同期比66.2%増加）、連結当期純利益11億99百万円（対前年同期比16.1%減少）を見込んでおります。

また、単体業績につきましては、売上高84億40百万円（対前年同期比19.1%増加）、経常利益19億5百万円（対前年同期比63.6%増加）、当期純利益11億5百万円（対前年同期比186.6%減少）を見込んでおります。

（注）業績予想につきましては、現時点で入手可能な情報に基づき当社グループで判断したものであります。予想には様々な不確定要素が内在しており、実際の業績はこれらの予想数値と異なる場合がありますので、この業績予想に全面的に依拠して投資等の判断を行うことは差し控え下さい。

#### 4. 事業の概況等に関する特別記載事項

以下には、当社及び当社グループの事業展開上のリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしも事業上のリスクに該当しない事項についても、投資者の投資判断上重要と考えられる事項については、投資家に対する情報開示の観点から積極的に開示しております。なお、当社は、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、その発生の回避及び発生した場合の対応に努める方針ですが、本株式に関する投資判断は、以下の特別記載事項及び本項以外の記載事項を、慎重に検討した上で行われる必要があると考えられます。

##### 1. 事業内容について

###### (1) 当社の事業内容について

当社は、non-PC端末向けの組込みソフトウェアの開発・販売を行っております。

当社製ソフトウェアは、機能的には米マイクロソフト社の「Internet Explorer」や米ネットスケープコミュニケーションズ社の「Netscape」と同様にインターネットを閲覧するためのブラウザ（注1）であります。しかし、当社製ソフトウェアには、パソコンに比べて消費電力や容量等が限られたOS（注2）やCPU（注3）を搭載したnon-PC端末に組込む作業を必要とするため、省電力、省メモリーという機能が求められ、これを充足するブラウザ技術を有しております。

この技術を生かした当社の売上は、大きく分類して製品売上高（受託開発及び基盤開発）とロイヤリティー収入に分けられます。

まず、製品売上高の内容は以下のとおりであります。

###### （受託開発）

メーカー等からの発注により、non-PC端末にインターネット閲覧機能やメール機能を備えさせるために、NetFront（情報家電向けに開発されたインターネットを閲覧するためのソフトウェア）、Compact NetFront（携帯電話等の移動体情報端末向けにNetFrontの機能を整理したインターネットを閲覧するためのソフトウェア）などの当社製ソフトウェアをnon-PC端末に組込むための受託開発業務を行っております。この組込みのためのソフトウェア受託開発業務に対して当社が得る対価が受託開発売上であります。受注から顧客ニーズに応じた組込みプログラム仕様設計、実際の組込み作業、評価版の完成、製品納入及び顧客の検収まで約3ヶ月から6ヶ月かかります。

###### （基盤開発）

当社製ソフトウェアを組込むための開発業務を、当社の得意先であるメーカー等及び販売代理店の技術者等が自ら行うことができる開発キット・SDK（software development kit）を販売しており、その売上が基盤開発売上であります。

次に、ロイヤリティー収入の内容は以下のとおりであります。

###### （ロイヤリティー）

当社製ソフトウェアの組込みを終えたメーカー等は、当社製ソフトウェアを搭載した携帯電話等を販売いたしますが、その出荷数に応じて当社はロイヤリティー収入を受け取っております。また、当社製SDKを利用してメーカー等が自ら当社製ソフトウェアを組込んだ場合にも、当社製ソフトウェアを搭載したメーカー等の製品の出荷数に応じて当社はロイヤリティー収入を受け取っております。

###### 収益構造について

受託開発については、顧客の要望仕様に応じて、当社製ソフトウェアをnon-PC端末に組込む作業を当社または外注委託先が行っております。このため、人件費または外注費が発生するため粗利率は高くありません。

基盤開発については、SDKの開発費用は発生時に計上いたします。他方売上は、SDKの販売数に応じて計上されるため、SDKの開発費用回収後は開発人員コストをかけずに販売数を拡大できるので、販売数が増加すれば利益率は向上いたします。

ロイヤリティー収入については、原則として費用が発生しないため売上高が全て利益となります。したがって、当初開発費用の回収後は、基盤開発及びロイヤリティー収入の構成比が増加するにつれて、利益率が向上する収益構造となっております。

#### 当社の主要なソフトウェア

当社の主要なソフトウェアは、以下のとおりであります。

名 称	概 要
NetFront	情報家電向けに開発されたインターネットを閲覧するためのソフトウェア。各 non-PC 端末に合わせて柔軟に表示可能なブラウザ（注 1）、メール機能及び各種インターネットプロトコル（注 4）で構成されたソフトウェアで、すでにテレビ、STB（注 5）、PDA（注 6）などのインターネット対応機器に搭載されております。特定の OS（注 2）、CPU（注 3）に依存せず省メモリ、省電力、リアルタイム処理を実現する組込みソフトウェアです。
NetFront SDK	NetFront を組込み、カスタマイズするためのシステム開発用キット。
Compact NetFront	携帯電話等の移動体情報端末向けに NetFront の機能を整理したインターネットを閲覧するためのソフトウェアであり、携帯電話や PDA、モバイルゲーム機などに搭載し、メール機能を付加できます。
NetFront for DTV	BS デジタルデータ放送に対応したデジタルテレビ向けに開発されたインターネットを閲覧するためのソフトウェアであり、BS デジタルデータ放送からのコンテンツ読み込み機能を NetFront に追加しています。
NetFront for Automotive	カーナビゲーション向けに開発されたインターネットを閲覧するためのソフトウェアであり、Mobile Web（注 7）仕様や POIX（注 8）準拠の位置情報関連機能等を NetFront に追加しています。
JV-Lite	Java（注 9）仕様に準拠して開発された、non-PC 端末向けソフトウェアで、メーカーを問わず様々な機器に動作可能な non-PC 端末向けのアプリケーション開発を可能にします。
JV-Lite SDK	JV-Lite を組込み、カスタマイズするためのシステム開発用キット。
AVE-TCP	non-PC 端末向けに多くの実績を持つ TCP/IP（注 10）プロトコルスタック（注 11）で、情報家電から OA、FA、マルチメディアまであらゆる分野における機器のネットワーク対応を可能にします。
AVE-TCP SDK	AVE-TCP を組込み、カスタマイズするためのシステム開発用キット。
AVE-Blue	Bluetooth（注 12）の仕様に準拠して開発された non-PC 端末向けのプロトコルスタック（注 11）で、ブラウザ（注 1）が搭載された PDA（注 6）やカーナビゲーションなどにおいて、容易な無線ネットワーク機能を実現します。
IrFront	IrDA（注 13）の仕様に準拠し、non-PC 端末向けの赤外線通信プロトコルスタック（注 11）で、ネットワークを持たない機器の赤外線機能を使用したインターネット接続を可能にします。
SSL/Crypt モジュール	電子商取引、電子決済における機密確保を実現する標準的なセキュア・プロトコル（注 14）と各種暗号モジュール（注 15）を提供します。

## (2) 当社事業内容を起因とするリスクについて

### ロイヤリティー単価の低下

当社売上のうちロイヤリティー収入は、当社製ソフトウェアが搭載された得意先製品が得意先であるメーカー等から出荷された数に応じて得ております。出荷数が増加するに従って、ロイヤリティー単価は低下する傾向にあります。また、得意先製品のバージョンアップに応じて、以前の単価自体も低下する場合があります。今後、様々な携帯電話等や情報家電の普及拡大を見込んでおりますが、仮にそれらの多くに当社製ソフトウェアが搭載されたとしても、ロイヤリティー単価の低下により、出荷本数や市場占有率の伸びに比例して当社売上が拡大する保証はありません。

### 外注先の確保

当社は、社内の人員不足の補完及び開発費用削減等を目的として、受託開発業務（当社製ソフトウェアの組込み・カスタマイズ作業）等について外注を行っております。受託開発業務は人手のかかる作業であるため、平成16年7月中間期の外注費（単体）は当期総製造費用の42.0%を占めており、当社にとって優秀な外注先を安定的に確保することが重要であると考えております。優秀な外注先が安定的に確保できない場合、当社及び当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

### SDK販売等の拡大による影響

受託開発業務は、当社の開発要員または外注先が従事しておりますが、現状では、開発業務案件に対して開発要員または外注先が不足しております。

そこで、当社または外注先における受託開発に係る人材面での業務を軽減するために、得意先であるメーカー等や販売代理店が自ら当社製ソフトウェアの組込み作業を行うことができるようにした主要な当社製ソフトウェア毎の開発キット（SDK）を開発、販売しております。また、当社製ソフトウェアを半導体メーカーに提供して当社製ソフトウェアを組込んだ半導体が普及することによって、当社及び外注先における受託開発業務を少なくすることができるものと考えております。しかし、良質なSDKが開発できなかったり、得意先であるメーカー等や販売代理店の技術レベルが向上しない場合、良質な当社製ソフトウェアを組込んだ半導体が普及しなかったり、当社製ソフトウェアの半導体への組込みが当社が想定したほど進まなかった場合には、当社及び当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

### 資金回収期間の資金繰りへの影響

受託開発業務は、通常開始から完成・検収まで約3ヶ月から6ヶ月かかります。回収対価として受託開発業務そのものに対する製品売上と、その後得意先製品の出荷台数に応じたロイヤリティー収入があります。当社としましては、製品売上とロイヤリティー収入の双方で利益を獲得する考えであり、このため、受託開発案件が通常サイクルより長くなり、かつ、このような案件が増加すれば、当社の長期的な資金繰りに影響を与える可能性があります。

## (3) 子会社について

### アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハーについて

欧州市場をターゲットに平成13年7月に設立いたしました（資本金1億93百万円、当社出資比率94.0%）。欧州市場に対応した携帯電話向け受託開発業務を請負っており、日本市場で蓄積された組込み業務ノウハウを欧州市場においても活用しておりますが、市場特性に合致せず、その業務ノウハウが生かされない場合には、当社及び当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

### アクセス・チャイナ・インク及びアクセス（北京）有限公司について

アクセス・チャイナ・インクは、中国市場での事業展開を統括する持株会社として平成14年8月に設立いたしました（資本金1億86百万円、当社出資比率98.0%）。また、中国市場をターゲットに、同社の100%子会社として、アクセス（北京）有限公司を平成14年8月に設立いたしました（資本金74百万円）。中国市場に対応した携帯電話向け受託開発業務を請負っており、日本市場で蓄積された組込み業務ノウハウを中国市場においても活用しておりますが、市場特性に合致せず、その業務ノウハウが生かされない場合には、当社及び当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

#### 株式会社アクセス・パブリッシングについて

non-PC端末を主対象としたデジタル・コンテンツの販売及び雑誌・書籍の編集、発行を目的として平成13年7月に設立いたしました（資本金2億15百万円、当社出資比率92.8%）。平成13年10月には、月刊誌「東京カレンダー」を創刊、販売を開始いたしており、今後は、各種デジタル・コンテンツの編集、販売の拡大を予定いたしております。しかしながら、デジタル・コンテンツの編集、販売が当初の予定どおりに進行しない場合、もしくは、想定通りに市場が拡大しない場合には、当社及び当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

#### 株式会社ACCESS北海道（旧商号株式会社ヴィ・ソニック）について

組込み業務を委託している当社の主な外注委託先であり、安定した外注先を常時確保する目的で平成12年7月に出資、関連会社（資本金18百万円、当社出資比率27.7%）といたしました。また、平成15年7月には、既存株主より株式譲渡を受け当社出資比率を100%に引き上げました。今後は、当社の技術力、経営ノウハウを利用して、同社を当社グループの受託開発事業を担う企業に育成する予定ですが、優秀な開発要員が常時確保できない等の理由で、同社の技術水準が当社グループの要求水準を維持し続けられない場合には、当社及び当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

（注）アクセス・システムズ・アメリカ・インクは、平成16年1月31日を以って営業活動を終了し、同社の主要業務につきましては、本社事業体制に吸収のうえ再編成されております。なお、同社は当中間連結会計期間中に清算を行っております。

## 2. 業界について

### (1) インターネット普及の将来性について

日本でのインターネット接続の商用サービスが始まった平成5年以来、パソコンの普及とブラウザの広がりにより、インターネットを利用する企業と個人層が急激に拡大いたしました。

この中で当社は、「1. 事業内容について」で記載したように、non-PC端末がインターネットに容易に接続できるインターネットソフトウェアを開発いたしました。このソフトウェアは、携帯電話等の移動体情報端末、ゲーム機等の固定・屋内情報端末に搭載され、インターネットを通じて様々な生活情報を手に入れたり、ショッピングを行うことを可能にいたします。この利便性のため、当社製ソフトウェアは株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモの「iモード」や「FOMA」サービス対応の携帯電話の多くに搭載され、これらの携帯電話は発売以来販売台数を伸ばしております。しかしながら、インターネットユーザーの増加や利用水準の高度化に対応した新しい技術の開発、応用の有無等インターネットの将来性に関しては依然として不透明な面があり、今後は従来どおりには当社製ソフトウェアが搭載されたnon-PC端末が普及しない可能性があり、当社及び当社グループの業績に影響を与える場合もあります。

### (2) 関連技術の標準化の動向

当社は、自社開発の技術あるいは第三者との共同開発の技術については、日本及び主要国において積極的に特許出願（共同出願）を行っております。

また一方で、自社開発した技術等であっても広く仕様を公開し、インターネットとの親和性や様々なnon-PC端末への移植性の高さなどを示すことにより最終的には当社製ソフトウェアの普及につながると考えられるものについては、積極的に標準化を働きかけております。

### (3) インターネットに関する法規制

インターネットの普及に伴い、近年、データの不正取得や改変等の不正行為及びインターネット通販における詐欺行為等による被害が増加していることから、日本においても、インターネット関連事業の規制のあり方について議論が開始されております。今後、インターネットの利用者や関連する事業者を規制対象とする法令等が制定されたり、既存の法令等の適用が明確になったり、あるいは何らかの自主規制が求められることにより、当社の現在あるいは将来の事業活動が大きく制約されたり、コスト増を招く可能性があります。

## 3. 競争環境について

### (1) 競争

インターネット関連業界においては、急速な技術変化及び競合相手による競合製品の投入等への対応が常に必要とされており、そのためには先行的に研究開発費及び人件費の負担を強いられるものと考えております。競合製品の投入等への対応については、以下の2点が当社及び当社グループの業績に重要な影響を与える可能性があります。

#### 得意先大手家電メーカー等におけるブラウザ内製化の可能性

当社は、特定のメーカー等の特定のnon-PC端末に依存しない移植性の高いブラウザの開発を行っておりますが、当社の販売先の多くは、大手家電メーカー、大手家庭用ゲーム機メーカー、大手電気通信事業者等であり、各社においてブラウザの開発が可能だけの技術力を有していると考えております。当社は今後も、より高機能で取扱い易いソフトウェアを適正な価格で提供するために、優秀な技術者を確保し、開発工程の合理化を推進することとしておりますが、それらが当社得意先の要求水準を満たさない場合には、当社製ソフトウェアは得意先であるメーカー等の内製化により主要な販売先を失う可能性があります。

#### 競争激化

インターネットの普及に伴い、パソコンに搭載するブラウザについてはメーカー間の競争が激化し、現在では無償配布が一般的となっております。将来的にnon-PC端末においても同様の事象が想定され、ブラウザメーカーの新規参入等により競争が激化すれば、当社製ソフトウェアは価格低下を余儀なくされる可能性があります。

すでにパソコン分野における基本ソフトウェア、ブラウザで事実上の業界標準を握っている米マイクロソフト社は、新しいインターネット戦略を発表しており、今後、同社はnon-PC端末のネットワーク化に必要なソフトウェア分野に進出してくるものと考えられます。同社は当社をはるかに上回る事業規模であり、今後同社は当社の重要な競争相手となる可能性があります。

## 4. 製品の品質管理について

製品化にあたっては品質管理に細心の注意を払い、事前に評価版を公開して様々な環境下での動作内容を検証し、特定のメーカーに依存しない移植性の高いソフトウェアの開発を目指しております。しかし、将来に販売される当社製ソフトウェアも含めて、得意先検収後であっても、当社製ソフトウェア中あるいはカスタマイズ過程に不具合・欠陥があることが明らかになった場合や、それにより当社製ソフトウェアを搭載した製品等のユーザーが損害を被ることになった場合には、不具合・欠陥の対応・処置や損害賠償の請求を受け、それにより当社事業が悪影響を受ける可能性があります。

## 5. 業績の変動について

### (1) 経営成績の変動

当社の属する情報技術産業界においては、最終消費者の需要動向、新規参入者の出現、革新的な技術の発見、各種標準化の動き、業界参加者間の事業統合・再編などの業界環境が短期間で大きく変化いたします。

当社は、将来的な事業規模拡大を見込み、近年、研究開発、営業関係の人員を積極的に採用しており、それに伴い管理部門の拡充も行ってきております。その結果、販売費及び一般管理費が増加する傾向にあります。

## (2) 研究開発費、開発費の負担増

当社は今後の事業展開に備えて、研究開発及び会社規模に応じた内部管理体制構築のため従業員の採用増を計画しており、労務費・人件費は増加するものと考えられます。一方、当社が考えるスピードでnon-PC端末が普及しない場合、あるいは強力な競争相手の参入により当社の市場占有率が大きく損われる場合等には、当社が想定する売上高計画が達成できなくなり、先行的に支出された研究開発費等の回収が困難になるなど、当社及び当社グループの業績に悪影響を与える可能性があります。

## 6. 知的財産権について

近年、当社事業に深い関係があるインターネット業界においては、インターネット関連技術に対して特許を申請する動きが急速に広まっており、商取引の仕組みそのものに特徴を有する特許（いわゆるビジネスモデル特許）の出願も多く行われております。このような状況下にあつて、当社といたしましては、自社技術の保護を図るべく積極的に特許申請を行うとともに、第三者の知的財産権についてはこれを極力侵害しないように努力しております。しかし、将来的に当社事業に関連した特許その他の知的財産権（特許等）がインターネット関連事業にどのように適用されるかについて予想するのは困難であり、今後、当社事業関連技術（いわゆるビジネスモデル特許を含む。以下同じ）に関する特許等が第三者に成立した場合、または現在すでに当社事業関連技術に関して当社が認識していない特許等が成立している場合、当該特許等の所有者から権利侵害に係る訴えを起こされることにより、当社が損害賠償義務を負ったり、当社事業の全部あるいは一部が継続できなくなる可能性があります。また、特許等の所有者から当社事業関連技術の使用継続を認められるとしても、当該特許等に関する対価（ロイヤリティー）の支払いが発生することにより、当社及び当社グループの業績が影響を受ける可能性があります。

また、当社はNetFrontやCompact NetFront等の当社の主要なソフトウェアに関する複数の特許を取得しております。しかし、インターネット関連技術は技術革新のスピードが速いため、当該分野においても新たな技術が開発されれば、当該技術を有する新規参入業者が増加することにより、当社及び当社グループの業績が悪影響を受ける可能性があります。

## 7. 当社の組織体制について

### (1) 特定の経営者への依存

当社代表取締役社長荒川 亨及び取締役副社長鎌田 富久は、当社の経営戦略立案や研究開発において、極めて重要な役割を果たしております。現状では、両名の当社からの離脱は想定しておりませんが、そのような事態となった場合、当社及び当社グループの業績は大きな影響を受けることになると考えられます。

### (2) 技術者確保の重要性

製品開発、業務提携先との業務推進及び製品組込み（カスタマイズ）のために、当社は優秀で経験豊富な技術者を多数確保する必要があります。しかし、日本におけるインターネット関連技術者の獲得を巡る競争は熾烈であり、かつ当社が欲する組込み技術者の数は限られているため、必要な技術者の確保には困難が予想されます。必要な技術者が適時に確保できない場合には、当社及び当社グループの業績に悪影響を与える可能性があります。

### (3) 会社組織の急拡大

当社は、平成16年7月中間期末において従業員数365名と小規模組織であるため、内部管理体制もこのような組織の規模に応じたものとなっております。今後も内部管理体制の一層の充実を図る方針ではありますが、業容拡大に伴って当社人員・組織が急激に拡大しつつあるため、適切かつ迅速な人的・組織的対応を行うことができない場合には、当社の業務効率・競争力が低下する可能性があります。



## 8. 事業展開について

### (1) 海外展開

本格的なnon-PC端末によるインターネット接続サービスは、現時点では日本以外ではあまり行われていませんが、今後は、諸外国においても急速に普及する可能性があると考え、当社は北米・南米、欧州及び中国における当社製ソフトウェアの開発及び販売の拠点として、ドイツ、中国、アメリカに子会社及び支店を設置いたしております。しかしながら、海外拠点の経営につきましては、現地の市場の立ち上がりの状況によっては赤字となる可能性もあると考えております。また、現地での当社製ソフトウェアを販売する優秀な営業担当者、マーケティング担当者、実際の組込み作業を行う優秀な技術者の確保等ができない場合には、適時に当社製ソフトウェアを供給することができなくなり、その結果、当社と競合する第三者がブラウザを供給することにより、海外においては、十分な市場占有率を確保できない可能性があり、投下資本、運転資金の回収が困難になることにより、当社及び当社グループの業績は大きな影響を受けることになると考えられます。

### (2) 業務提携等

当社は、non-PC端末向けのブラウザを中心としたソフトウェアの開発・販売を行っていますが、顧客に対してブラウザ技術を中心としたサービスのみではなく、これと関連する幅広いサービスを提供するためには、各分野の有力企業と提携することにより技術等の補完を行う必要があると考えております。当社は、今後も必要に応じて業務提携を実施する方針であります。

しかし、これらの業務提携により、当社には研究開発費等が先行的に発生しますが、当社売上高への貢献はいずれも早くも数年後になるものと考えております。

また、業務提携に際して、相手先企業あるいは合併企業等に当社が出資することがあります。このような出資案件については、業界環境の変化が激しいこと及び起業から間もない会社が多いことから未だ事業化の目処のたっていない案件が多くなっております。今後の動向によっては出資先会社の財政状態が悪化することも考えられますが、その場合には必要に応じて投資有価証券の評価減等の会計手当を行う可能性があります。投資額は、現在の事業規模と比較して多額となる可能性もあり、出資先の事業の状況によっては出資金額を回収できなくなる可能性があり、当社及び当社グループの業績に悪影響を与える可能性があります。

## 9. 無配当であること

当社は今まで、財務体質を強化するとともに必要な研究開発投資を実施するために内部留保の充実に重点を置いてきており、従来、配当を実施しておりませんでした。今後は、株主に対する利益還元を経営の重要な課題の一つとして位置づけており、事業展開の状況と各期の経営成績を総合的に勘案して決定することを基本方針としておりますが、当面は、安定した財務体質に裏付けられた経営基盤の強化を図るため、内部留保に重点を置くこととしております。

### (注) 1. ブラウザ

インターネット上で目的の情報を取り出すのに用いられるソフトウェアの総称で、データの編集はできないが内容を概観するために用いられる。代表的なものとして、米マイクロソフト社の「Internet Explorer」や米ネットスケープ・コミュニケーションズ社の「Netscape」がある。

### 2. OS

オペレーティング・システムの略。コンピュータを動作させるために不可欠な制御プログラムとその制御プログラムの下で稼動する基本的な操作の環境を作って提供するソフトウェアやプログラムの総称

### 3. CPU

セントラル・プロセッシング・ユニットの略で中央処理装置をいう。周辺機器を制御してデータを受け取り、そのデータを演算・加工し、メモリーに記憶したり、結果を周辺機器に出力するまでの一連の動作を行う。

### 4. インターネットプロトコル

インターネット上で複数のデータ通信を行うために必要な取り決め。

- 5 . STB  
セット・トップ・ボックスの略で、テレビに接続する小型の機器。インターネット接続等の機能を付加できる。
- 6 . PDA  
パーソナル・デジタル・アシスタントの略で携帯情報端末をいう。
- 7 . Mobile Web  
モバイルWeb推進協議会が策定したモバイル情報端末（カーナビゲーション/携帯端末）向けのインターネット接続仕様。
- 8 . POIX (Point Of Internet xchange language)  
モバイル標準化検討委員会（MOSTEC）がインターネット上で位置情報を交換することを目的として規定した位置情報記述言語。
- 9 . Java  
1995年、米サン・マイクロシステムズ社が発表した、ネットワーク用のあらゆる機器に統一したプログラミング言語を提供するソフトウェア。登場した当時は、主にPCやUNIX上で使用されていたが、最近では、次世代の携帯情報端末などに不可欠な技術へと発展、注目されている。
- 10 . TCP/IP (Transmission Control Protocol/Internet Protocol)  
1975年、DARPA（米国防総省高等研究計画局）で開発されたインターネット標準プロトコル。世界的に最も普及しているプロトコルとして、インターネットのみならずイントラネットやLANなどにも応用されている。
- 11 . プロトコルスタック  
データ通信を行うために必要な取り決め（プロトコル）を実装したソフトウェア。
- 12 . Bluetooth  
移動電話機やパソコンその他のポータブル機器の間をつなぐ、短距離無線伝送技術の名称。
- 13 . IrDA (Infrared Data Association)  
赤外線を利用した近距離のデータ通信を行う技術仕様を策定するために1993年に設立された業界団体。また、同団体が定めた赤外線通信の規格。PCやPDAまたは携帯電話などのモバイルコンピュータが持つ情報（アドレス帳、カレンダー、メール、メモ）などの接続互換性を目的としている。
- 14 . セキュア・プロトコル  
暗号処理のための標準的な手順や仕組み。
- 15 . 暗号モジュール  
ネットワークで送信するメッセージを第三者が理解できないように変換するソフト。

## 5. 中間連結財務諸表

### (1) 中間連結貸借対照表

区分	注記 番号	当中間連結会計期間末 (平成16年7月31日)		前中間連結会計期間末 (平成15年7月31日)		前連結会計年度の 要約連結貸借対照表 (平成16年1月31日)		
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)	
(資産の部)								
流動資産								
1. 現金及び預金	* 1	6,761,667		3,755,385		5,445,023		
2. 受取手形及び売掛金		1,723,223		1,888,310		2,370,211		
3. 有価証券		-		36		32		
4. たな卸資産		825,706		519,508		833,735		
5. 繰延税金資産		140,072		-		76,782		
6. その他		188,948		350,393		229,383		
貸倒引当金		3,008		4,011		4,546		
流動資産合計		9,636,610	82.6	6,509,623	83.3	8,950,623	82.1	
固定資産								
1. 有形固定資産								
(1) 器具備品								
		615,684		518,369		603,054		
減価償却累計額		311,049	304,635	260,424	257,945	298,212	304,842	
(2) その他								
		533,238		422,185		526,253		
減価償却累計額		123,754	409,484	108,005	314,179	108,281	417,971	
有形固定資産合計			714,119		572,125		722,813	6.7
2. 無形固定資産								
(1) 連結調整勘定								
			115,929		144,912		130,420	
(2) その他								
			459,424		197,555		414,892	
無形固定資産合計			575,354		342,467		545,312	5.0
3. 投資その他の資産								
(1) 投資有価証券								
			106,876		178,200		106,876	
(2) 繰延税金資産								
			25,941		-		401,340	
(3) その他								
			606,703		211,598		170,096	
貸倒引当金			-		515		-	
投資その他の資産 合計			739,521		389,283		678,312	6.2
固定資産合計			2,028,994		1,303,876		1,946,438	17.9
資産合計			11,665,604		7,813,500		10,897,062	100.0

区分	注記 番号	当中間連結会計期間末 (平成16年7月31日)		前中間連結会計期間末 (平成15年7月31日)		前連結会計年度の 要約連結貸借対照表 (平成16年1月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
(負債の部)							
流動負債							
1. 買掛金		321,142		310,968		305,686	
2. 短期借入金	* 1	350,045		348,664		302,676	
3. 賞与引当金		93,314		53,709		107,519	
4. 返品調整引当金		31,409		21,809		19,573	
5. その他	* 1	846,092		659,611		1,135,692	
流動負債合計		1,642,004	14.1	1,394,762	17.9	1,871,147	17.2
固定負債							
1. 繰延税金負債		-		9,114		-	
2. 退職給付引当金		109,520		56,092		67,569	
3. 長期借入金		-		4,117		-	
4. その他		-		7,128		5,100	
固定負債合計		109,520	0.9	76,452	0.9	72,669	0.6
負債合計		1,751,524	15.0	1,471,214	18.8	1,943,816	17.8
(少数株主持分)							
少数株主持分		2,716	0.0	2,765	0.0	2,722	0.0
(資本の部)							
資本金		4,939,903	42.4	4,069,004	52.1	4,653,532	42.7
資本剰余金		5,623,628	48.2	4,742,379	60.7	5,337,257	49.0
利益剰余金		659,678	5.7	2,563,880	32.8	1,102,511	10.1
その他有価証券評価 差額金		-	-	12,586	0.2	971	0.0
為替換算調整勘定		7,510	0.1	79,430	1.0	63,214	0.6
資本合計		9,911,364	85.0	6,339,519	81.2	8,950,522	82.2
負債、少数株主持分 及び資本合計		11,665,604	100.0	7,813,500	100.0	10,897,062	100.0

## (2) 中間連結損益計算書

区分	注記 番号	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)		前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)		前連結会計年度の 要約連結損益計算書 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)	
		金額(千円)	百分比 (%)	金額(千円)	百分比 (%)	金額(千円)	百分比 (%)
売上高		5,040,494	100.0	3,483,081	100.0	8,793,139	100.0
売上原価		2,164,285	42.9	1,396,992	40.1	3,730,530	42.4
売上総利益		2,876,209	57.1	2,086,088	59.9	5,062,608	57.6
返品調整引当金繰入額		31,409	0.6	21,809	0.6	19,573	0.2
返品調整引当金戻入額		19,573	0.3	35,894	1.0	35,894	0.3
差引売上総利益		2,864,372	56.8	2,100,173	60.3	5,078,929	57.7
販売費及び一般管理費	* 1	2,165,709	42.9	2,134,547	61.3	3,783,510	43.0
営業利益(損失)		698,663	13.9	34,374	1.0	1,295,419	14.7
営業外収益							
1. 受取利息		7,434		4,137		6,826	
2. 受取配当金		101		100		225	
3. 為替差益		30,724		10,662		-	
4. その他		4,073	42,333	1,886	16,785	11,514	18,566
営業外費用							
1. 支払利息		2,104		3,012		5,508	
2. 新株発行費		1,791		33		8,576	
3. その他		785	4,681	2,757	5,803	95,519	109,605
経常利益(損失)		736,315	14.6	23,391	0.7	1,204,380	13.7
特別利益							
1. 貸倒引当金戻入益		1,538		-		4,982	
2. 投資有価証券売却益		2,892		2,876		16,313	
3. 関係会社清算配当金		-		29,124		29,124	
4. 為替換算調整勘定取崩額		68,291		-		-	
5. 固定資産売却益	* 2	531	73,253	-	32,000	-	50,420

区分	注記 番号	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)			前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)			前連結会計年度の 要約連結損益計算書 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)		
		金額(千円)		百分比 (%)	金額(千円)		百分比 (%)	金額(千円)		百分比 (%)
特別損失										
1. 固定資産除却損	* 3	18,692			5,000			36,459		
2. 投資有価証券評価損		-			30,000			30,000		
3. 出資金投資損失		5,224	23,917	0.5	3,657	38,657	1.1	3,657	70,116	0.8
税金等調整前中間 (当期)純利益 (純損失)			785,651	15.6		30,048	0.9		1,184,683	13.5
法人税、住民税及 び事業税		4,108			2,045			259,984		
法人税等調整額		338,768	342,876	6.8	-	2,045	0.0	504,782	244,797	2.8
少数株主利益(損失)			58	0.0		176	0.0		30	0.0
中間(当期)純利益(純損失)			442,832	8.8		31,917	0.9		1,429,451	16.3

## (3) 中間連結剰余金計算書

区分	注記 番号	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)		前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)		前連結会計年度の 連結剰余金計算書 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)		
		金額(千円)		金額(千円)		金額(千円)		
(資本剰余金の部)								
			5,337,257		4,737,629		4,737,629	
1	増資による新株式の 発行	286,370	286,370	4,750	4,750	599,628	599,628	
			5,623,628		4,742,379		5,337,257	
(利益剰余金の部)								
			1,102,511		2,531,962		2,531,962	
1	中間(当期)純利益	442,832	442,832	-	-	1,429,451	1,429,451	
1	中間(当期)純損失	-	-	31,917	31,917	-	-	
			659,678		2,563,880		1,102,511	

## (4) 中間連結キャッシュ・フロー計算書

		当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度の要約 連結キャッシュ・フ ロー計算書 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
区分	注記 番号	金額(千円)	金額(千円)	金額(千円)
営業活動によるキャッシュ・ フロー				
税金等調整前中間(当期) 純利益(純損失)		785,651	30,048	1,184,683
減価償却費		123,163	81,671	178,827
連結調整勘定償却額		14,491	-	14,491
投資有価証券評価損		-	30,000	30,000
投資有価証券売却益		2,892	2,876	16,313
関連会社清算配当金		-	29,124	29,124
固定資産売却益		531	-	-
固定資産除却損		18,692	5,000	36,459
出資金投資損失		5,224	3,657	3,657
為替換算調整勘定取崩額		68,291	-	-
為替差損益		18,672	-	7,171
貸倒引当金の減少額		1,538	19	4,982
賞与引当金の増減額		14,205	46,785	7,024
退職給付引当金の増加額		41,951	9,278	20,755
返品調整引当金の増減額		11,836	14,085	16,321
受取利息及び受取配当金		7,535	4,137	7,051
支払利息		2,104	3,012	5,508
売上債権の増減額		647,835	347,528	158,712
前渡金の増減額		8	4,672	8,715
たな卸資産の増減額		7,064	118,480	434,960
仕入債務の増減額		5,652	532	12,405
未払金の増減額		93,777	153,097	245,626
前受金の増減額		55,108	37,448	96,884
未払消費税等の増減額		2,495	62,336	20,439
預り金の増加額		198,172	-	32,631
その他		47,633	55,465	66,074
小計		1,649,408	311,476	1,263,012
利息及び配当金受取額		3,943	4,249	7,097
利息支払額		2,104	4,279	4,646
法人税等支払額		256,280	4,090	14,577
営業活動によるキャッシュ・ フロー		1,394,967	307,357	1,250,885



		当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度の要約 連結キャッシュ・フ ロー計算書 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
区分	注記 番号	金額(千円)	金額(千円)	金額(千円)
投資活動によるキャッシュ・ フロー				
定期預金の預入による支出		1,548	-	1,102,430
定期預金の払戻による収入		500,000	259,940	555,554
有形固定資産の取得による 支出		123,937	35,844	237,346
無形固定資産の取得による 支出		121,415	26,091	243,980
投資有価証券の売却による 収入		46	10,556	73,993
出資金の返戻による収入		-	1,294	1,314
長期貸付金の貸付による支 出		461,205	-	-
連結範囲の変更を伴う子会 社株式の取得による収入	*2	-	19,230	19,230
関連会社清算配当金による 収入		-	53,624	53,624
その他		3,191	13,308	3,697
投資活動によるキャッシュ・ フロー		211,250	269,401	876,342
財務活動によるキャッシュ・ フロー				
短期借入金の純増減額		47,368	7,000	38,987
株式発行による収入		572,741	7,000	1,178,557
その他		-	-	4,117
財務活動によるキャッシュ・ フロー		620,110	14,000	1,135,452
現金及び現金同等物に係る換 算差額		10,763	4,895	20,561
現金及び現金同等物の増加額		1,814,590	595,653	1,489,433
現金及び現金同等物の期首残 高		4,105,477	2,616,043	2,616,043
現金及び現金同等物の中間期 末(期末)残高	*1	5,920,068	3,211,697	4,105,477

中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
1. 連結の範囲に関する事項	<p>(1) 連結子会社の数 6社 アクセス・システムズ・アメリカ・インク アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ペー・ハー 株式会社アクセス・パブリッシング アクセス・チャイナ・インク アクセス(北京)有限公司 株式会社ACCESS北海道</p> <p>なお、アクセス・システムズ・アメリカ・インクは当中間連結会計期間中に清算を行いました。</p> <p>(2)</p> <p>(3)</p>	<p>(1) 連結子会社の数 6社 アクセス・システムズ・アメリカ・インク アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ペー・ハー 株式会社アクセス・パブリッシング アクセス・チャイナ・インク アクセス(北京)有限公司 株式会社ヴィ・ソニック</p> <p>なお、前連結会計年度において持分法を適用しておりました株式会社ヴィ・ソニックは当中間連結会計期間末において株式の追加取得により連結子会社になりましたので、貸借対照表のみ連結を行っております。</p> <p>(2) 非連結子会社の名称 株式会社アクセス・クロッシング</p> <p>(3) 非連結子会社について連結の範囲から除いた理由 株式会社アクセス・クロッシングは、総資産、売上高、中間純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等が、いずれも当中間連結財務諸表に重要な影響を及ぼさないため、連結の範囲から除外しております。</p>	<p>(1) 連結子会社の数 6社 アクセス・システムズ・アメリカ・インク アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ペー・ハー 株式会社アクセス・パブリッシング アクセス・チャイナ・インク アクセス(北京)有限公司 株式会社ACCESS北海道(旧商号株式会社ヴィ・ソニック)</p> <p>なお、前連結会計年度において持分法を適用しておりました株式会社ヴィ・ソニックは、当連結会計年度における株式の追加取得により子会社となりましたので、連結の範囲に含めることといたしました。ただし、同社につきましては平成15年7月31日を支配獲得日とみなしているため、同日以降の財務諸表のみを連結いたしております。</p> <p>また、連結子会社化に伴い商号を株式会社ヴィ・ソニックから株式会社ACCESS北海道に変更いたしております。</p> <p>(2)</p> <p>(3)</p>

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
2. 持分法の適用に関する事項	<p>(1) 持分法適用の関連会社数 1社 アイティアアクセス株式会社</p> <p>(2)</p> <p>(3)</p>	<p>(1) 持分法適用の関連会社数 1社 アイティアアクセス株式会社</p> <p>なお、前連結会計年度まで持分法を適用しておりました株式会社ヴィ・ソニックについては株式の追加取得により連結子会社となったため、また株式会社エグゼモバイルについては重要性が乏しくなったため、当中間連結会計期間より持分法の範囲から除外しております。</p> <p>(2) 持分法非適用の非連結子会社の数 1社 株式会社アクセス・クロッシング 持分法非適用会社は、中間純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等に及ぼす影響が軽微であるため、持分法の範囲から除外しております。</p> <p>(3) 持分法非適用の関連会社の数 1社 株式会社エグゼモバイル 持分法非適用会社は、中間純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等に及ぼす影響が軽微であるため、持分法の範囲から除外しております。</p>	<p>(1) 持分法適用の関連会社数 1社 アイティアアクセス株式会社</p> <p>なお、前連結会計年度まで持分法を適用しておりました株式会社ヴィ・ソニック（当連結会計年度中に商号を株式会社ACCESS北海道に変更）については株式の追加取得により連結子会社となったため、また株式会社エグゼモバイルについては重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より持分法の適用範囲から除外しております。</p> <p>(2)</p> <p>(3) 持分法非適用の関連会社の数 1社 株式会社エグゼモバイル 持分法非適用会社は、当期純利益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等に及ぼす影響が軽微であるため、持分法の適用範囲から除外しております。</p>

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)																												
<p>3. 連結子会社の中間決算日 (決算日)等に関する事項</p>	<p>連結子会社の中間決算日が中間連結決算日と異なる会社は、次のとおりであります。</p> <table border="0"> <thead> <tr> <th>会社名</th> <th>中間決算日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー</td> <td>6月30日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス・チャイナ・インク</td> <td>6月30日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス(北京)有限公司</td> <td>6月30日*1</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1 連結子会社の中間決算日現在の中間財務諸表を使用しております。ただし、中間連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。</p> <p>* アクセス・システムズ・アメリカ・インクは、当中間連結会計期間において清算いたしております。</p>	会社名	中間決算日	アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー	6月30日*1	アクセス・チャイナ・インク	6月30日*1	アクセス(北京)有限公司	6月30日*1	<p>連結子会社の中間決算日が中間連結決算日と異なる会社は、次のとおりであります。</p> <table border="0"> <thead> <tr> <th>会社名</th> <th>中間決算日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アクセス・システムズ・アメリカ・インク</td> <td>6月30日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー</td> <td>6月30日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス・チャイナ・インク</td> <td>6月30日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス(北京)有限公司</td> <td>6月30日*1</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1 同左</p>	会社名	中間決算日	アクセス・システムズ・アメリカ・インク	6月30日*1	アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー	6月30日*1	アクセス・チャイナ・インク	6月30日*1	アクセス(北京)有限公司	6月30日*1	<p>連結子会社の決算日が連結決算日と異なる会社は、次のとおりであります。</p> <table border="0"> <thead> <tr> <th>会社名</th> <th>決算日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>アクセス・システムズ・アメリカ・インク</td> <td>12月31日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー</td> <td>12月31日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス・チャイナ・インク</td> <td>12月31日*1</td> </tr> <tr> <td>アクセス(北京)有限公司</td> <td>12月31日*1</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1 連結子会社の決算日現在の財務諸表を使用しております。ただし、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。</p> <p>なお、株式会社ACCESS北海道については、決算日を連結決算日と統一するため当連結会計年度より3月31日から1月31日に決算日を変更しております。また、当連結会計年度は、支配獲得日以降平成16年1月31日までの6ヶ月間の財務諸表を使用しております。</p>	会社名	決算日	アクセス・システムズ・アメリカ・インク	12月31日*1	アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー	12月31日*1	アクセス・チャイナ・インク	12月31日*1	アクセス(北京)有限公司	12月31日*1
会社名	中間決算日																														
アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー	6月30日*1																														
アクセス・チャイナ・インク	6月30日*1																														
アクセス(北京)有限公司	6月30日*1																														
会社名	中間決算日																														
アクセス・システムズ・アメリカ・インク	6月30日*1																														
アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー	6月30日*1																														
アクセス・チャイナ・インク	6月30日*1																														
アクセス(北京)有限公司	6月30日*1																														
会社名	決算日																														
アクセス・システムズ・アメリカ・インク	12月31日*1																														
アクセス・システムズ・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー	12月31日*1																														
アクセス・チャイナ・インク	12月31日*1																														
アクセス(北京)有限公司	12月31日*1																														
<p>4. 会計処理基準に関する事項</p>	<p>(イ)重要な資産の評価基準及び評価方法</p> <p>有価証券</p> <p>(1) 子会社株式及び関連会社株式 移動平均法による原価法</p> <p>(2) その他有価証券 時価のあるもの</p>	<p>(イ)重要な資産の評価基準及び評価方法</p> <p>有価証券</p> <p>(1) 子会社株式及び関連会社株式 同左</p> <p>(2) その他有価証券 時価のあるもの 中間決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部資本直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)</p>	<p>(イ)重要な資産の評価基準及び評価方法</p> <p>有価証券</p> <p>(1) 子会社株式及び関連会社株式 同左</p> <p>(2) その他有価証券 時価のあるもの 決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部資本直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)</p>																												

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
	<p>時価のないもの 移動平均法による原価 法 たな卸資産 (1)仕掛品 個別法による原価法 (口)重要な減価償却資産の減価償 却の方法 有形固定資産 定率法 なお、主な耐用年数は以下 のとおりです。 建物： 3～47年 器具備品：4～8年 ただし、平成10年4月1日 以降取得した建物(建物付 属設備を除く)について は、定額法によっておりま す。 無形固定資産 定額法 なお、ソフトウェア(自社 利用分)については、社内 における利用可能期間(3 ～5年)に基づいて定額法 によっております。 長期前払費用 定額法 (八)重要な引当金の計上基準 貸倒引当金 債権の貸倒れによる損失に 備えるため、一般債権につ いては貸倒実績率により、 貸倒懸念債権等特定の債権 については個別に回収可能 性を勘案し、回収不能見込 額を計上しております。 賞与引当金 従業員の賞与の支払に備え るため、会社が算定した支 給見込額の当中間期負担額 を計上しております。</p>	<p>時価のないもの 同左 たな卸資産 (1)仕掛品 同左 (口)重要な減価償却資産の減価償 却の方法 有形固定資産 定率法 なお、主な耐用年数は以下 のとおりです。 建物： 6～47年 器具備品：4～8年 ただし、平成10年4月1日 以降取得した建物(建物付 属設備を除く)について は、定額法によっておりま す。 無形固定資産 定額法 なお、ソフトウェア(自社 利用分)については、社内 における利用可能期間(5 年)に基づいて定額法に よっております。 長期前払費用 同左 (八)重要な引当金の計上基準 貸倒引当金 同左  賞与引当金 同左</p>	<p>時価のないもの 同左 たな卸資産 (1)仕掛品 同左 (口)重要な減価償却資産の減価償 却の方法 有形固定資産 定率法 なお、主な耐用年数は以下 のとおりです。 建物： 6～47年 器具備品：4～8年 ただし、平成10年4月1日 以降取得した建物(建物付 属設備を除く)について は、定額法によっておりま す。 無形固定資産 定額法 なお、ソフトウェア(自社 利用分)については、社内 における利用可能期間(3 ～5年)に基づいて定額法 によっております。 長期前払費用 同左 (八)重要な引当金の計上基準 貸倒引当金 同左  賞与引当金 従業員の賞与の支払に備え るため、会社が算定した支 給見込額の当期負担額を計 上しております。</p>

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
	<p>退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、退職給付会計に関する実務指針（中間報告）（日本公認会計士協会 会計制度委員会報告第13号）に定める簡便法（期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法）により、当中間期末において発生していると認められる額を計上しております。</p>	<p>退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、退職給付会計に関する実務指針（中間報告）（日本公認会計士協会 会計制度委員会報告第13号）に定める簡便法（期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法）により、当中間期末において発生していると認められる額を計上しております。</p>	<p>（追加情報）</p> <p>提出会社は賃金規程を改定し、5月1日から10月31日まで及び11月1日から4月30日までの支給対象期間を2月1日から7月31日まで及び8月1日から1月31日までに変更することと致しました。なお、移行措置として、平成16年7月支給賞与の支給対象期間を平成15年11月1日から平成16年1月31日までとしております。</p> <p>この変更に伴い、従来の方法によった場合に比べ、営業利益、経常利益及び税金等調整前当期純利益は26,023千円それぞれ減少しております。</p> <p>退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、退職給付会計に関する実務指針（中間報告）（日本公認会計士協会 会計制度委員会報告第13号）に定める簡便法（期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法）により、計上しております。</p>

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
	<p>(追加情報)</p> <p>提出会社は、退職金規程を改定し、従来の退職一時金制度のほか前払退職金制度を導入いたしました。前払退職金制度は一年毎に退職金の増加分の算定を行い、期末に退職金前払手当として支給する制度であります。</p> <p>当社従業員は、退職一時金制度を継続するか前払退職金制度に変更するかを選択することができ、一度変更した後は前払退職金制度のみが適用されることとなります。なお新退職金規程の適用後に入社した従業員については、前払退職金制度のみが適用されることとなります。</p> <p>前払退職金制度が適用となる勤続期間が3年未満の従業員については、前払退職金の支給時期は勤続期間が3年を経過して初めて到来する期末となりますが、支給時期まではこれらの前払退職金要支給額もあわせて退職給付引当金として計上しております。</p> <p>退職金規程を改定した結果、退職給付費用が26,146千円増加し、営業利益、経常利益及び税金等調整前中間純利益は21,041千円減少しております。なお、セグメント情報に与える影響は、当該箇所に記載しております。</p>		

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
	<p>返品調整引当金 連結子会社の株式会社アクセス・パブリッシングは、出版物の返品による損失に備えるため、返品見込額の売買利益相当額及び返品に伴い発生する廃棄損相当額を計上しております。</p> <p>(二)重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準 外貨建金銭債権債務は、中間決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。 なお、在外支店の資産及び負債は中間決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。</p> <p>また、在外子会社等の資産、負債、収益及び費用は中間決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は少数株主持分及び資本の部における為替換算調整勘定に含めております。</p> <p>(ホ)重要なリース取引の処理方法 リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。</p> <p>(ハ)その他中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 消費税等の会計処理 消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。</p>	<p>返品調整引当金 同左</p> <p>(二)重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準 外貨建金銭債権債務は、中間決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。 なお、在外子会社等の資産、負債、収益及び費用は中間決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は少数株主持分及び資本の部における為替換算調整勘定に含めております。</p> <p>(ホ)重要なリース取引の処理方法 同左</p> <p>(ハ)その他中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 消費税等の会計処理 同左</p>	<p>返品調整引当金 同左</p> <p>(二)重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準 外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。 なお、在外子会社等の資産、負債、収益及び費用は決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は少数株主持分及び資本の部における為替換算調整勘定に含めております。</p> <p>(ホ)重要なリース取引の処理方法 同左</p> <p>(ハ)その他連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 消費税等の会計処理 同左</p>



項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	<p>自己株式及び法定 準備金の取崩等に 関する会計基準</p> <p>当連結会計年度から「自己 株式及び法定準備金の取崩 等に関する会計基準」(企 業会計基準第1号)を全面 的に適用しております。こ れによる当連結会計年度の 損益に与える影響はありま せん。</p> <p>なお、連結財務諸表規則の 改正により、当連結会計年 度における連結貸借対照表 の資本の部及び連結剰余金 計算書については、改正後 の連結財務諸表規則により 作成しております。</p> <p>1株当たり情報</p> <p>「1株当たり当期純利益に関 する会計基準」(企業会計基 準第2号)及び「1株当たり 当期純利益に関する会計基準 の適用指針」(企業会計基準 適用指針第4号)が平成14 年4月1日以後開始する連結 会計年度に係る連結財務諸表 から適用されることになった ことに伴い、当連結会計年度 から同会計基準及び適用指針 によっております。なお、こ れによる影響については、 「1株当たり情報に関する注 記」に記載しております。</p> <p>連結剰余金計算書</p> <p>連結財務諸表規則の改正によ り、当連結会計年度より「欠 損金期首残高」は「利益剰余 金期首残高」、「欠損金減少 高」は「利益剰余金増加 高」、「欠損金増加高」は 「利益剰余金減少高」として 表示しております。</p>

項目	当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)
5. 連結調整勘定の償却に関する事項	連結調整勘定は発生日以降5年間均等償却を原則としております。	連結調整勘定は発生日以降5年間均等償却を原則としております。 なお、前中間連結会計期間に初めて発生した連結調整勘定は、投資先が休眠状態であり、翌期以降の効果の発現が乏しいと考えられたため、一括償却を行ったものであります。	連結調整勘定は発生日以降5年間均等償却を原則としております。 なお、前連結会計年度に初めて発生した連結調整勘定は、投資先が休眠状態であり、翌期以降の効果の発現が乏しいと考えられたため、一括償却を行ったものであります。
6. 中間連結キャッシュ・フロー計算書(連結キャッシュ・フロー計算書)における資金の範囲	手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。	同左	同左

#### 会計処理方法の変更

当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)
<p>提出会社は、従来、取得価額が10万円以上20万円未満の少額減価償却資産を器具及び備品、無形固定資産に計上し、減価償却は、資産の属性に応じた耐用年数に基づく定率法により行っておりましたが、当中間連結会計期間から、取得時に全額費用処理する方法に変更いたしました。</p> <p>この変更は、当該資産の最近の使用状況等を勘案し、事務の効率化と財務体質の一層の健全化を図るため行ったものです。</p> <p>この変更により、従来と同一の方法によった場合に比べ、売上総利益は4,800千円減少し、営業利益、経常利益及び税金等調整前中間純利益はそれぞれ13,545千円減少しております。</p> <p>なお、セグメント情報に与える影響は、当該箇所に記載しております。</p>	

表示方法の変更

<p>当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)</p>	<p>前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)</p>
<p>(中間連結キャッシュ・フロー計算書) 前中間連結会計期間まで営業活動によるキャッシュ・フローの「その他」に含めて表示しておりました「預り金の増加額」(前中間連結会計期間の計上額は29,638千円)は、当中間連結会計期間において重要性が高くなりましたので、区分掲記しております。</p>	<p>(中間連結キャッシュ・フロー計算書) 前中間連結会計期間まで営業活動によるキャッシュ・フローの「その他」に含めて表示しておりました「未払消費税等の減少額」(前中間連結会計期間の計上額は64,032千円)は、当中間連結会計期間において重要性が高くなりましたので、区分掲記しております。</p>

追加情報

<p>当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)</p>	<p>前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)</p>	<p>前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)</p>
	<p>中間連結貸借対照表について 中間連結財務諸表規則の改正により、当中間連結会計期間より「資本準備金」は「資本剰余金」、「欠損金」は「利益剰余金」として表示しております。 連結剰余金計算書について 中間連結財務諸表規則の改正により、当中間連結会計期間より連結剰余金計算書を資本剰余金の部及び利益剰余金の部に区分して記載しております。 また、当中間連結会計期間より「欠損金期首残高」は「利益剰余金期首残高」、「欠損金減少高」は「利益剰余金増加高」、「欠損金増加高」は「利益剰余金減少高」として表示しております。</p>	

注記事項

(中間連結貸借対照表関係)

当中間連結会計期間末 (平成16年7月31日)	前中間連結会計期間末 (平成15年7月31日)	前連結会計年度 (平成16年1月31日)
<p>* 1 担保提供資産 (担保に供している資産)</p> <p>定期預金 41,382千円 (上記に対応する債務)</p> <p>米国支店の リース債務 4,992千円</p>	<p>* 1 担保提供資産 (担保に供している資産)</p> <p>定期預金 500,000千円 (上記に対応する債務)</p> <p>短期借入金 337,000千円</p>	<p>* 1 担保提供資産 (担保に供している資産)</p> <p>定期預金 500,000千円 (上記に対応する債務)</p> <p>短期借入金 302,000千円</p>

(中間連結損益計算書関係)

当中間連結会計期間 (自平成16年2月1日 至平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自平成15年2月1日 至平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自平成15年2月1日 至平成16年1月31日)
<p>* 1 販売費及び一般管理費のうち 主要な費目及び金額は、次の とおりであります。</p> <p>給与手当 704,473千円 研究開発費 539,020千円 賞与引当金繰入 額 26,728千円</p>	<p>* 1 販売費及び一般管理費のうち 主要な費目及び金額は、次の とおりであります。</p> <p>給与手当 783,449千円 研究開発費 604,434千円</p>	<p>* 1 販売費及び一般管理費のうち 主要な費目及び金額は、次の とおりであります。</p> <p>給与手当 1,064,245千円 研究開発費 1,054,269千円</p>
<p>* 2 固定資産売却益の内容は、次 のとおりであります。</p> <p>器具備品 531千円</p>	<p>* 2</p>	<p>* 2</p>
<p>* 3 固定資産除却損の内容は、次 のとおりであります。</p> <p>器具備品 3,512千円 長期前払費用 15,180千円</p>	<p>* 3 固定資産除却損の内容は、次 のとおりであります。</p> <p>ソフトウェア 5,000千円</p>	<p>* 3 固定資産除却損の内容は、次 のとおりであります。</p> <p>建物 25,102千円 器具備品 6,357千円 ソフトウェア 5,000千円</p>

(中間連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)																						
<p>* 1 現金及び現金同等物の中間期末残高と中間連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係 (平成16年7月31日現在)</p> <table border="0"> <tr> <td>現金及び預金</td> <td style="text-align: right;">6,761,667千円</td> </tr> <tr> <td>預入期間が3ヶ月を超える定期預金等</td> <td style="text-align: right;">841,599千円</td> </tr> <tr> <td><b>現金及び現金同等物</b></td> <td style="text-align: right;"><b>5,920,068千円</b></td> </tr> </table>	現金及び預金	6,761,667千円	預入期間が3ヶ月を超える定期預金等	841,599千円	<b>現金及び現金同等物</b>	<b>5,920,068千円</b>	<p>* 1 現金及び現金同等物の中間期末残高と中間連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係 (平成15年7月31日現在)</p> <table border="0"> <tr> <td>現金及び預金</td> <td style="text-align: right;">3,755,385千円</td> </tr> <tr> <td>有価証券 (マネー・マネジメント・ファンド)</td> <td style="text-align: right;">36千円</td> </tr> <tr> <td>預入期間が3ヶ月を超える定期預金等</td> <td style="text-align: right;">543,724千円</td> </tr> <tr> <td><b>現金及び現金同等物</b></td> <td style="text-align: right;"><b>3,211,697千円</b></td> </tr> </table>	現金及び預金	3,755,385千円	有価証券 (マネー・マネジメント・ファンド)	36千円	預入期間が3ヶ月を超える定期預金等	543,724千円	<b>現金及び現金同等物</b>	<b>3,211,697千円</b>	<p>* 1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係 (平成16年1月31日現在)</p> <table border="0"> <tr> <td>現金及び預金</td> <td style="text-align: right;">5,445,023千円</td> </tr> <tr> <td>有価証券 (マネー・マネジメント・ファンド)</td> <td style="text-align: right;">32千円</td> </tr> <tr> <td>預入期間が3ヶ月を超える定期預金等</td> <td style="text-align: right;">1,339,577千円</td> </tr> <tr> <td><b>現金及び現金同等物</b></td> <td style="text-align: right;"><b>4,105,477千円</b></td> </tr> </table>	現金及び預金	5,445,023千円	有価証券 (マネー・マネジメント・ファンド)	32千円	預入期間が3ヶ月を超える定期預金等	1,339,577千円	<b>現金及び現金同等物</b>	<b>4,105,477千円</b>
現金及び預金	6,761,667千円																							
預入期間が3ヶ月を超える定期預金等	841,599千円																							
<b>現金及び現金同等物</b>	<b>5,920,068千円</b>																							
現金及び預金	3,755,385千円																							
有価証券 (マネー・マネジメント・ファンド)	36千円																							
預入期間が3ヶ月を超える定期預金等	543,724千円																							
<b>現金及び現金同等物</b>	<b>3,211,697千円</b>																							
現金及び預金	5,445,023千円																							
有価証券 (マネー・マネジメント・ファンド)	32千円																							
預入期間が3ヶ月を超える定期預金等	1,339,577千円																							
<b>現金及び現金同等物</b>	<b>4,105,477千円</b>																							
<p>* 2</p>	<p>* 2</p>	<p>* 2 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳</p> <p>株式の取得により新たに株式会社ACCESS北海道(変更前の商号株式会社ヴィ・ソニック)を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに同社株式の取得価額と同社取得による収入(純額)との関係は次のとおりであります。</p> <p style="text-align: right;">(千円)</p> <table border="0"> <tr> <td>流動資産</td> <td style="text-align: right;">25,987</td> </tr> <tr> <td>固定資産</td> <td style="text-align: right;">3,059</td> </tr> <tr> <td>連結調整勘定</td> <td style="text-align: right;">144,912</td> </tr> <tr> <td>流動負債</td> <td style="text-align: right;">169,841</td> </tr> <tr> <td>固定負債</td> <td style="text-align: right;">4,117</td> </tr> <tr> <td>株式会社ACCESS北海道の株式取得価格</td> <td style="text-align: right;">0</td> </tr> <tr> <td>株式会社ACCESS北海道の現金及び現金同等物</td> <td style="text-align: right;">19,231</td> </tr> <tr> <td><b>差引：株式会社ACCESS北海道取得による収入</b></td> <td style="text-align: right;"><b>19,230</b></td> </tr> </table>	流動資産	25,987	固定資産	3,059	連結調整勘定	144,912	流動負債	169,841	固定負債	4,117	株式会社ACCESS北海道の株式取得価格	0	株式会社ACCESS北海道の現金及び現金同等物	19,231	<b>差引：株式会社ACCESS北海道取得による収入</b>	<b>19,230</b>						
流動資産	25,987																							
固定資産	3,059																							
連結調整勘定	144,912																							
流動負債	169,841																							
固定負債	4,117																							
株式会社ACCESS北海道の株式取得価格	0																							
株式会社ACCESS北海道の現金及び現金同等物	19,231																							
<b>差引：株式会社ACCESS北海道取得による収入</b>	<b>19,230</b>																							

## (リース取引関係)

当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)				前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)				前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)			
1. リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引 (1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び中間期末残高相当額				1. リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引 (1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び中間期末残高相当額				1. リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引 (1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額			
	取得価額相当額 (千円)	減価償却累計額相当額 (千円)	中間期末残高相当額 (千円)		取得価額相当額 (千円)	減価償却累計額相当額 (千円)	中間期末残高相当額 (千円)		取得価額相当額 (千円)	減価償却累計額相当額 (千円)	期末残高相当額 (千円)
器具備品	148,750	108,536	40,214	器具備品	204,700	124,668	80,031	器具備品	208,103	147,185	60,918
ソフトウエア	7,783	5,720	2,063	ソフトウエア	12,229	8,609	3,619	ソフトウエア	7,783	4,942	2,841
その他	3,195	722	2,473	合計	216,929	133,278	83,651	その他	3,195	404	2,791
合計	159,729	114,979	44,750					合計	219,082	152,531	66,551
(2) 未経過リース料中間期末残高相当額				(2) 未経過リース料中間期末残高相当額				(2) 未経過リース料期末残高相当額			
	1年内	33,012千円			1年内	42,725千円			1年内	38,915千円	
	1年超	14,545千円			1年超	45,484千円			1年超	31,593千円	
	合計	47,557千円			合計	88,210千円			合計	70,509千円	
(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額				(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額				(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額			
	支払リース料	22,327千円			支払リース料	24,098千円			支払リース料	47,884千円	
	減価償却費相当額	19,946千円			減価償却費相当額	21,777千円			減価償却費相当額	43,083千円	
	支払利息相当額	1,331千円			支払利息相当額	1,976千円			支払利息相当額	3,700千円	
(4) 減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。				(4) 減価償却費相当額の算定方法 同左				(4) 減価償却費相当額の算定方法 同左			
(5) 利息相当額の算定方法 リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各期への配分方法については利息法によっております。				(5) 利息相当額の算定方法 同左				(5) 利息相当額の算定方法 同左			
2. オペレーティング・リース取引 未経過リース料				2. オペレーティング・リース取引 未経過リース料				2. オペレーティング・リース取引 未経過リース料			
	1年内	1,654千円			1年内	1,697千円			1年内	1,695千円	
	1年超	1,232千円			1年超	2,875千円			1年超	2,053千円	
	合計	2,887千円			合計	4,572千円			合計	3,749千円	

(有価証券関係)

当中間連結会計期間末(平成16年7月31日)

1.時価評価されていない主な有価証券の内容

	中間連結貸借対照表計上額(千円)
その他有価証券	
非上場株式(店頭売買株式を除く)	106,876

前中間連結会計期間末(平成15年7月31日)

1.その他有価証券で時価のあるもの

	取得原価(千円)	中間連結貸借対照表計上額(千円)	差額(千円)
(1) 株式	50,000	71,700	21,700
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	50,000	71,700	21,700

2.時価評価されていない主な有価証券の内容

	中間連結貸借対照表計上額(千円)
その他有価証券	
非上場株式(店頭売買株式を除く)	106,500
マネー・マネジメント・ファンド	36

(注) 発行会社の財務状態の悪化により実質価格が帳簿価格に比べて著しく下落した場合は、相当の減損処理を実施しております。

なお、時価評価されていないその他有価証券についての当中間連結会計期間における減損処理額は、30,000千円であります。

前連結会計年度末（平成16年1月31日）

1. 時価評価されていない主な有価証券の内容

	連結貸借対照表計上額（千円）
その他有価証券	
非上場株式（店頭売買株式を除く）	106,876
マネー・マネジメント・ファンド	32

（注） 発行会社の財務状態の悪化により実質価格が帳簿価格に比べて著しく下落した場合は、相当の減損処理を実施しております。

なお、時価評価されていないその他有価証券についての当連結会計年度における減損処理額は、30,000千円であります。

（デリバティブ取引関係）

当中間連結会計期間 （自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日）	前中間連結会計期間 （自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日）	前連結会計年度 （自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日）
取引の時価等に関する事項 時価の算定方法 当中間連結会計期間末では、 デリバティブ取引を行っていないため、該当事項はありません。	当社グループは、デリバティブ取引を全く利用しておりませんので、 該当事項はありません。	取引の時価等に関する事項 時価の算定方法 当連結会計年度末では、デリバティブ取引を行っていないため、該当事項はありません。



(セグメント情報)

1. 事業の種類別セグメント情報

当中間連結会計期間(自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)

	ソフトウェア の受託開発事 業(千円)	コンテンツ系 事業(千円)	計(千円)	消去又は全社 (千円)	連結(千円)
売上高					
(1) 外部顧客に対する売上 高	4,513,164	527,330	5,040,494	-	5,040,494
(2) セグメント間の内部売 上高又は振替高	-	13,350	13,350	(13,350)	-
計	4,513,164	540,680	5,053,844	(13,350)	5,040,494
営業費用	3,800,211	554,970	4,355,181	(13,350)	4,341,831
営業利益(損失)	712,952	14,289	698,663	-	698,663

(注) 1. 事業区分の方法

事業は、製品の系列及び市場の類似性を考慮して区分しております。

2. 各区分に属する主要な製品

事業区分	主要製品
ソフトウェアの受託開発事業	non-PC端末にインターネット閲覧機能、メール機能等を備えさせるためのソフトウェアの開発、コンサルティング
コンテンツ系事業	月刊誌「東京カレンダー」の編集、発行等

3. 会計処理方法の変更

提出会社は、従来、取得価額が10万円以上20万円未満の少額減価償却資産を器具及び備品、無形固定資産に計上し、減価償却は、資産の属性に応じた耐用年数に基づく定率法により行っておりましたが、当中間連結会計期間から、取得時に全額費用処理する方法に変更いたしました。

この変更により、従来と同一の方法によった場合に比べ、「ソフトウェアの受託開発事業」の営業費用が13,545千円増加し、営業利益は同額減少しております。

4. 追加情報

提出会社は、当中間連結会計期間より退職金規程を改定し、従来の退職一時金制度のほか前払退職金制度を導入いたしました。この結果、「ソフトウェアの受託開発事業」の営業費用が21,041千円増加し、営業利益は同額減少しております。

前中間連結会計期間（自 平成15年 2月 1日 至 平成15年 7月31日）

	ソフトウェア の受託開発事 業（千円）	コンテンツ系 事業（千円）	計（千円）	消去又は全社 （千円）	連結（千円）
売上高					
(1) 外部顧客に対する売上高	3,096,939	386,141	3,483,081	-	3,483,081
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	-	11,355	11,355	(11,355)	-
計	3,096,939	397,496	3,494,436	(11,355)	3,483,081
営業費用	3,133,223	395,318	3,528,542	(11,086)	3,517,455
営業利益（損失）	36,284	2,178	34,105	(268)	34,374

(注) 1. 事業区分の方法

事業は、製品の系列及び市場の類似性を考慮して区分しております。

2. 各区分に属する主要な製品

事業区分	主要製品
ソフトウェアの受託開発事業	non-PC端末にインターネット閲覧機能、メール機能等を備えさせるためのソフトウェアの開発、コンサルティング
コンテンツ系事業	月刊誌「東京カレンダー」の編集、発行等

前連結会計年度（自 平成15年 2月 1日 至 平成16年 1月31日）

	ソフトウェア の受託開発事 業（千円）	コンテンツ系 事業（千円）	計（千円）	消去又は全社 （千円）	連結（千円）
売上高					
(1) 外部顧客に対する売上高	7,956,926	836,213	8,793,139	-	8,793,139
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	-	36,615	36,615	(36,615)	-
計	7,956,926	872,828	8,829,754	(36,615)	8,793,139
営業費用	6,676,946	857,441	7,534,387	(36,667)	7,497,720
営業利益	1,279,980	15,386	1,295,366	52	1,295,419

(注) 1. 事業区分の方法

事業は、製品の系列及び市場の類似性を考慮して区分しております。

2. 各区分に属する主要な製品

事業区分	主要製品
ソフトウェアの受託開発事業	non-PC端末にインターネット閲覧機能、メール機能等を備えさせるためのソフトウェアの開発、コンサルティング
コンテンツ系事業	月刊誌「東京カレンダー」の編集、発行等

3. 追加情報

(賞与の支給対象期間の変更)

「中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」の4.(八)に記載のとおり、提出会社は賃金規程を改定し、賞与の支給対象期間を変更いたしました。

この変更に伴い、従来の方法によった場合に比べ、「ソフトウェアの受託開発事業」の営業費用が

26,023千円増加し、営業利益は同額減少しております。

## 2. 所在地別セグメント情報

当中間連結会計期間（自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日）

	日本 (千円)	欧州 (千円)	その他 (千円)	計 (千円)	消去又は全社 (千円)	連結 (千円)
売上高						
(1) 外部顧客に対する売上高	4,329,104	366,191	345,198	5,040,494	-	5,040,494
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	115,744	95,116	12,734	223,595	(223,595)	-
計	4,444,849	461,307	357,932	5,264,089	(223,595)	5,040,494
営業費用	3,622,098	439,626	510,652	4,572,377	(230,546)	4,341,831
営業利益（損失）	822,750	21,681	152,720	691,711	6,951	698,663

（注）1. 国又は地域は、地理的近接度により区分しております。

なお、前中間連結会計期間に「その他」に含めて表示しておりました「欧州」につきましては、当該セグメントの売上高（セグメント間の内部売上高又は振替高を含む。）が全セグメントの売上高の10%未満であります。当社グループにおける欧州地域事業の重要性を考慮いたしまして、区分掲記しております。前中間連結会計期間における「欧州」の売上高は266,215千円、営業損失は107,457千円であります。

2. 本邦以外の区分に属する国又は地域の内訳は次のとおりであります。

欧州

その他・・・北米・南米、アジア

3. 会計処理方法の変更

提出会社は、従来、取得価額が10万円以上20万円未満の少額減価償却資産を器具及び備品、無形固定資産に計上し、減価償却は、資産の属性に応じた耐用年数に基づく定率法により行っておりましたが、当中間連結会計期間から、取得時に全額費用処理する方法に変更いたしました。この変更により、従来と同一の方法によった場合に比べ、「日本」の営業費用が13,545千円増加し、営業利益は同額減少しております。

4. 追加情報

提出会社は、当中間連結会計期間より退職金規程を改定し、従来の退職一時金制度のほか前払退職金制度を導入いたしました。この結果、「日本」の営業費用が21,041千円増加し、営業利益は同額減少しております。

前中間連結会計期間（自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日）

	日本（千円）	その他 (千円)	計（千円）	消去又は全社 (千円)	連結（千円）
売上高					
(1) 外部顧客に対する売上高	2,983,070	500,011	3,483,081	-	3,483,081
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	86,859	87,539	174,398	(174,398)	-
計	3,069,929	587,550	3,657,480	(174,398)	3,483,081
営業費用	2,807,434	893,619	3,701,053	(183,597)	3,517,455
営業利益（損失）	262,495	306,068	43,573	9,199	34,374

- (注) 1. 国又は地域は、地理的近接度により区分しております。  
 2. 本邦以外の区分に属する国又は地域の内訳は次のとおりであります。  
 その他...北米・南米、欧州、アジア

前連結会計年度(自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)

	日本(千円)	その他(千円)	計(千円)	消去又は全社(千円)	連結(千円)
売上高					
(1) 外部顧客に対する売上高	7,708,050	1,085,089	8,793,139	-	8,793,139
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	231,120	538,250	769,370	(769,370)	-
計	7,939,171	1,623,339	9,562,510	(769,370)	8,793,139
営業費用	6,637,428	1,617,913	8,255,342	(757,621)	7,497,720
営業利益	1,301,742	5,425	1,307,168	(11,749)	1,295,419

- (注) 1. 国又は地域は、地理的近接度により区分しております。  
 2. 本邦以外の区分に属する国又は地域の内訳は次のとおりであります。  
 その他...北米・南米、欧州、アジア  
 3. 追加情報  
 (賞与の支給対象期間の変更)  
 「中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」の4.(ハ)に記載のとおり、提出会社は賃金規程を改定し、賞与の支給対象期間を変更いたしました。  
 この変更に伴い、従来の方法によった場合に比べ、「日本」の営業費用が26,023千円増加し、営業利益は同額減少しております。

### 3. 海外売上高

当中間連結会計期間(自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)

	その他の地域	計
海外売上高(千円)	574,161	574,161
連結売上高(千円)	-	5,040,494
海外売上高の連結売上高に占める割合(%)	11.4	11.4

- (注) 1. 国又は地域は、地理的近接度により区分しております。  
 2. 海外売上高は、当社及び連結子会社の本邦以外の国又は地域における売上高であります。  
 なお、その他の地域に属する国又は地域は北米・南米、欧州、アジアであります。

前中間連結会計期間(自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)

	その他の地域	計
海外売上高(千円)	444,566	444,566
連結売上高(千円)	-	3,483,081
海外売上高の連結売上高に占める割合(%)	12.8	12.8

- (注) 1. 国又は地域は、地理的近接度により区分しております。  
 2. 海外売上高は、当社及び連結子会社の本邦以外の国又は地域における売上高であります。  
 なお、その他の地域に属する国又は地域は北米・南米、欧州、アジアであります。

前連結会計年度（自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日）

	その他の地域	計
海外売上高（千円）	1,017,212	1,017,212
連結売上高（千円）	-	8,793,139
海外売上高の連結売上高に占める割合（％）	11.6	11.6

（注）1．国又は地域は、地理的近接度により区分しております。

2．海外売上高は、当社及び連結子会社の本邦以外の国又は地域における売上高であります。

なお、その他の地域に属する国又は地域は北米・南米、欧州、アジアであります。

( 1株当たり情報 )

当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)														
<p>1株当たり純資産額 95,398.81円</p> <p>1株当たり中間純利益金額 4,306.11円</p> <p>潜在株式調整後1株当たり中間純利益金額 4,174.75円</p> <p>当社は、平成16年7月20日付をもって普通株式1株につき5株の割合をもって株式分割を行っております。なお、当該株式分割が前期首に行われたと仮定した場合の1株当たり情報については、それぞれ以下のとおりとなります。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>前中間連結会計期間</th> <th>前連結会計年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1株当たり純資産額 69,186.07円</td> <td>1株当たり純資産額 87,467.24円</td> </tr> <tr> <td>1株当たり中間純損失金額 348.55円</td> <td>1株当たり当期純利益金額 15,369.70円</td> </tr> <tr> <td>—</td> <td>潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 13,932.31円</td> </tr> </tbody> </table> <p>なお、潜在株式調整後1株当たり中間純利益金額については、1株当たり中間純損失が計上されているため記載しておりません。</p>	前中間連結会計期間	前連結会計年度	1株当たり純資産額 69,186.07円	1株当たり純資産額 87,467.24円	1株当たり中間純損失金額 348.55円	1株当たり当期純利益金額 15,369.70円	—	潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 13,932.31円	<p>1株当たり純資産額 345,930.35円</p> <p>1株当たり中間純損失金額 1,742.73円</p> <p>なお、潜在株式調整後1株当たり中間純利益金額については、1株当たり中間純損失が計上されているため記載しておりません。</p> <p>(追加情報)</p> <p>当中間連結会計期間より「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。なお、同会計基準及び適用指針を前中間連結会計期間及び前連結会計年度に適用して算定した場合の1株当たり情報については、それぞれ以下のとおりとなります。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>前中間連結会計期間</th> <th>前連結会計年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1株当たり純資産額 249,025.52円</td> <td>1株当たり純資産額 347,592.98円</td> </tr> <tr> <td>1株当たり中間純損失金額 54,262.84円</td> <td>1株当たり当期純損失金額 22,852.05円</td> </tr> </tbody> </table> <p>なお、潜在株式調整後1株当たり中間(当期)純利益金額については、1株当たり中間(当期)純損失が計上されているため記載しておりません。</p>	前中間連結会計期間	前連結会計年度	1株当たり純資産額 249,025.52円	1株当たり純資産額 347,592.98円	1株当たり中間純損失金額 54,262.84円	1株当たり当期純損失金額 22,852.05円	<p>1株当たり純資産額 437,336.19円</p> <p>1株当たり当期純利益金額 76,848.50円</p> <p>潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 69,661.54円</p> <p>当連結会計年度より「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。なお、同会計基準及び適用指針を前連結会計年度に適用して算定した場合は、以下のとおりとなります。</p> <p>前連結会計年度</p> <p>1株当たり純資産額 347,592.98円</p> <p>1株当たり当期純損失金額 22,852.05円</p> <p>なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、1株当たり当期純損失が計上されているため記載しておりません。</p>
前中間連結会計期間	前連結会計年度															
1株当たり純資産額 69,186.07円	1株当たり純資産額 87,467.24円															
1株当たり中間純損失金額 348.55円	1株当たり当期純利益金額 15,369.70円															
—	潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 13,932.31円															
前中間連結会計期間	前連結会計年度															
1株当たり純資産額 249,025.52円	1株当たり純資産額 347,592.98円															
1株当たり中間純損失金額 54,262.84円	1株当たり当期純損失金額 22,852.05円															

(注) 1株当たり中間(当期)純利益(純損失)金額及び潜在株式調整後1株当たり中間(当期)純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当中間連結会計期間 (自平成16年2月1日 至平成16年7月31日)	前中間連結会計期間 (自平成15年2月1日 至平成15年7月31日)	前連結会計年度 (自平成15年2月1日 至平成16年1月31日)
1株当たり中間(当期)純利益金額			
中間(当期)純利益(純損失) (千円)	442,832	31,917	1,429,451
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-	-
普通株式に係る中間(当期)純利益 (純損失)(千円)	442,832	31,917	1,429,451
期中平均株式数(株)	102,838.35	18,314.38	18,600.90
潜在株式調整後1株当たり中間(当期)純利益金額			
中間(当期)純利益調整額(千円)	-	-	-
普通株式増加数(株)	3,235.88	-	1,919.05
(うち新株引受権附社債(旧商法第341条ノ8の規定に基づくもの))	-	-	(1,521.78)
(うち新株予約権(旧商法第280条ノ19の規定に基づくもの))	(1,518.11)	(-)	(107.76)
(うち新株予約権(商法第280条ノ20及び21の規定に基づくもの))	(1,717.77)	(-)	(289.51)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり中間(当期)純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	新株予約権(商法第280条ノ20及び21の規定に基づく新株予約権の目的となる株式の数495株)	新株予約権(旧商法第280条ノ19の規定に基づく新株予約権の目的となる株式の数431株)	-

(重要な後発事象)

<p>当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)</p>	<p>前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)</p>	<p>前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)</p>														
<p>C-valley Inc. の株式取得および連結子会社化</p> <p>提出会社は、中国市場における、着メロ、壁紙などのマルチメディアコンテンツの開発及び配信を目的として、平成16年8月15日に、C-valley Inc. に対して出資を行い、C-valley Inc. 及びC-valley(Beijing)information Technology Ltd. を連結子会社といたしました。</p> <p>子会社の概要</p> <p>社名 C-valley Inc. (持株会社)</p> <p>所在地 イギリス領ケイマン島</p> <p>資本の額 US \$ 3,000,000 (全株主の出資完了時)</p> <p>出資比率 (全株主の出資完了時)</p> <p>株式会社ACCESS (33.3%) Bluesky Hooldings Limited (33.3%) その他 (33.3%)</p> <p>提出会社は、同社を実質的に支配していると認められるため、同社は提出会社の連結子会社となります。</p> <p>決算期 12月</p> <p>また、C-valley Inc. は、100% 出資子会社であります C-valley (Beijing)information Technology Ltd. を中国北京市に、設立いたしております。</p>	<p>該当事項はありません。</p>	<p>1. 株式の分割</p> <p>提出会社は、平成16年3月23日開催の取締役会の決議に基づき、次のとおり株式分割による新株式を発行する予定であります。</p> <p>(1) 平成16年7月20日付をもって、普通株式1株を5株に分割いたします。</p> <p>(2) 分割の方法</p> <p>平成16年5月31日最終の株主名簿及び実質株主名簿に記載または記録された株主の所有株式数を1株につき5株の割合をもって分割いたします。</p> <p>(3) 分割により増加する株式数 普通株式 平成16年5月31日最終の発行済株式総数に4を乗じた株式数</p> <p>(4) 配当起算日 平成16年2月1日</p> <p>当該株式分割が前期首に行われたと仮定した場合の前連結会計年度における1株当たり情報及び当期首に行われたと仮定した場合の当連結会計年度における1株当たり情報は、それぞれ以下のとおりとなります。</p> <table border="1" data-bbox="1018 1525 1383 1989"> <thead> <tr> <th>当連結会計年度</th> <th>前連結会計年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1株当たり純資産額</td> <td>1株当たり純資産額</td> </tr> <tr> <td>87,467.24円</td> <td>69,518.60円</td> </tr> <tr> <td>1株当たり当期純利益金額</td> <td>1株当たり当期純損失金額</td> </tr> <tr> <td>15,369.70円</td> <td>4,570.41円</td> </tr> <tr> <td>潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額</td> <td></td> </tr> <tr> <td>13,932.31円</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	当連結会計年度	前連結会計年度	1株当たり純資産額	1株当たり純資産額	87,467.24円	69,518.60円	1株当たり当期純利益金額	1株当たり当期純損失金額	15,369.70円	4,570.41円	潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		13,932.31円	
当連結会計年度	前連結会計年度															
1株当たり純資産額	1株当たり純資産額															
87,467.24円	69,518.60円															
1株当たり当期純利益金額	1株当たり当期純損失金額															
15,369.70円	4,570.41円															
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額																
13,932.31円																



<p>当中間連結会計期間 (自 平成16年2月1日 至 平成16年7月31日)</p>	<p>前中間連結会計期間 (自 平成15年2月1日 至 平成15年7月31日)</p>	<p>前連結会計年度 (自 平成15年2月1日 至 平成16年1月31日)</p>
		<p>なお、前連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、1株当たり当期純損失が計上されているため記載しておりません。</p> <p>2. 子会社の清算 平成16年3月12日開催の取締役会において、連結子会社であるアクセス・システムズ・アメリカ・インク(当社出資比率100%)の清算を決議いたしました。</p> <p>(1) 清算される子会社の概要 社名 アクセス・システムズ・アメリカ・インク 所在地 米国カリフォルニア州フリーモント 資本金 6,450千米ドル 主な事業内容 北米・南米市場向けの当社製ソフトウェアの開発・販売</p> <p>(2) 清算の理由 アクセス・システムズ・アメリカ・インクは、北米・南米市場をターゲットにnon-PC端末向けの組込みソフトウェアの開発・販売を主たる事業としておりましたが、平成16年1月末までに一部事業を当社に移管し、また、当社グループにおける同市場での開発・販売の再編および効率化を目的として、清算することいたしました。</p> <p>(3) 当該事象の損益に与える影響額 清算手続終了時(平成16年6月予定)において、保有資産の処分状況によっては、追加的に費用が発生する可能性があります。その影響は軽微であると考えております。</p>